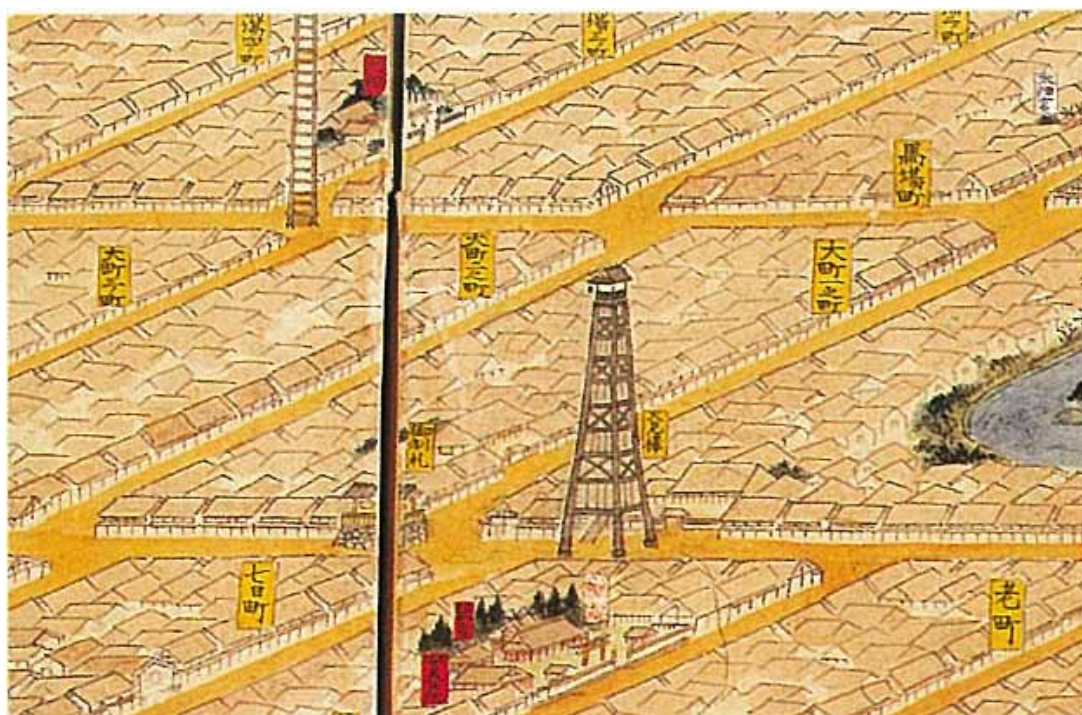

大町四ッ角札ノ辻界隈 地域史



大町四ッ角札ノ辻界隈地域史づくり懇談会

- 目 次 -

目次 頁	掲載内容
はじめに	()
歴史年表	()
位置図	()
地域資源マップ	()
1 . 歴史文化	1
1 - 1 会津若松の町割	2 実施した人物、割出された町、当時の地図
1 - 2 町名の由来	8 札ノ辻界隈の町名の由来
1 - 3 みち	1 0 札ノ辻、各街道、交通
1 - 4 地域の変遷	1 3 会津若松全体の変遷（中世、近世別）
1 - 5 昔のまちなみ	1 9 昔と今の写真
1 - 6 神社仏閣	2 1 各寺院、神社及びマップ
1 - 7 歴史ある建物	3 3 建物及びマップ
2 . 商人文化	3 6
2 - 1 商人の歴史	3 7 昔の商人
2 - 2 会津漆器	3 8 会津漆器の歴史、変遷及びお店の概要 等
2 - 3 酒造	4 2 酒造の歴史、変遷及びお店の概要 等
2 - 4 会津菓子	4 5 会津菓子及びお店の概要 等
2 - 5 民芸品等	4 8 絵ろうそく、会津もめん、起きあがり小法師、会津風車、初音、会津唐人凧、赤べこ、桐製品の概要及びお店の概要 等
2 - 6 旅籠・料亭・遊郭	5 6 旅籠・料亭・遊郭の歴史、以前の立地場所 等
2 - 7 観光施設	5 7 観光施設の概要 等
3 . 生活文化	6 1
3 - 1 行事	6 2 年中行事の月日、内容 等
3 - 2 会津の食	7 0 会津若松の食文化の概要
4 . 人物	7 1

はじめに

福島県西部に位置する会津地方は、広い盆地と豊かな山河を背景に、古代から太平洋岸と日本海岸の接点として様々な文化が流入し、それらが歴史文化資源として蓄積されてきました。

なかでも会津若松市は、会津松平氏二十三万石の城下町として大きく発展したまちであり、「鶴ヶ城」「飯盛山」等を筆頭に現在でも史跡や往時の面影を残し、多くの人々が訪れる観光都市として、全国的に知名度の高い地域であります。

特に、当懇談会の対象地域である「大町四ッ角札ノ辻界限」は、奥州の交通起点として、東から白河街道と二本松・福島街道、西からは越後街道、南から日光街道、北からは米沢街道が交差する会津五街道の要衝として、街道を通じ歴史や文化が運ばれ、人々が行き交う城下として繁栄が続き、今もなお由緒ある神社仏閣や老舗、昔からの伝統行事など貴重な地域固有の資源が多数存在しています。

このような歴史背景を活かし、現在大町通り・七日町通りを中心とする「まちなか観光エリア」として、多くの観光客を集客する個性ある魅力的な街並みが形成されつつあります。

このような中、この地域固有の資源を活かし、失わずに後世に継承していくためにも、「地域資源を活かしたまちづくり」を進める必要があり、「大町四ッ角札ノ辻界限地域史づくり懇談会」において、地域資源等に関する資料を整理・検討し「大町四ッ角札ノ辻界限地域史」として取りまとめることとしました。

本書の特徴としては、地域史として住民の方々が「守りたい」「育てたい」「伝えたい」と感じたものをまとめたものであり、資源の解説等は地域の方々の思いを尊重して掲載しています。



資料：江戸時代における大町四ッ角札ノ辻を再生した模型

大町四ッ角札ノ辻界限 歴史年表(1/2)

時代	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	安土桃山	江戸
西暦	七〇	七六〇	一一九二	一二三五	一二九三	一五七四	一六〇三	
大町札ノ辻界限の歴史	陸奥国より石城・石背二国が分置され、会津郡は石背国に属す(七一八)	田中稲荷神社建立(一〇四二)	金剛寺建立(一一三〇)	東明寺・延命地藏尊(大町) 建立(一二八〇) 実成寺建立(一三〇三)	融通寺建立(一三六二) 観音寺建立(一三九二) 弥勒寺建立(一四二五)	西蓮寺建立(一五七四) 光明寺建立(一五八八)	光明寺移転(一五九二) 威徳院移転(一五九二) 融通寺移転(一五九二) 三宝胞衣荒神社移転(一五九二) 長福寺建立(一五九八) 延命地藏尊(七日町) 建立(一六〇二) 阿弥陀寺建立(一六〇三) 見性寺建立(一六一九) 実成寺移転(一六二三)	白木屋漆器店創業(一六五〇頃) 檜古堂創建(一六六四) ほしばんローソク店創業(一七七一) 常光寺境内に劇場人形座建設(一七九二) 鶴之江酒造創業(一七九四)
会津若松の歴史		佐原義連が会津に所領を与えられた(一一八九)	岩松経家が会津の地頭職を与えられる(一三三三) 葺名直盛が会津に下向、幕内に城郭を構えた(一三七九)	葺名盛久が会津守護職を譲られる(一四三四) 弟盛信が跡を継ぐ(一四四四) 盛詮が跡を継ぐ(一四五二)	伊達政宗が葺名氏を破り黒川へ入る(一五八九) 蒲生氏郷、会津を与えられる(一五九〇)	上杉景勝が会津に入る(一五九八) 蒲生秀行、会津領主となる(一六〇二)	加藤嘉明を会津に移す(一六二七) 保科正之を会津に移す(一六四三) 大町辻に制札を掲げる(一六四三) 保科正経が封を継ぐ(一六六九) 松平正容が3代目を襲封(一六八二) 松平容貞が4代目を襲封(一七三二) 松平容頌が5代目を襲封(一七五〇)	松平容住が6代目を襲封(一八〇五) 松平容衆が7代目を襲封(一八〇六) 松平容敬が8代目を襲封(一八二二) 松平容保が9代目を襲封(一八五二) 松平容保京都守護職を任命(一八六二)

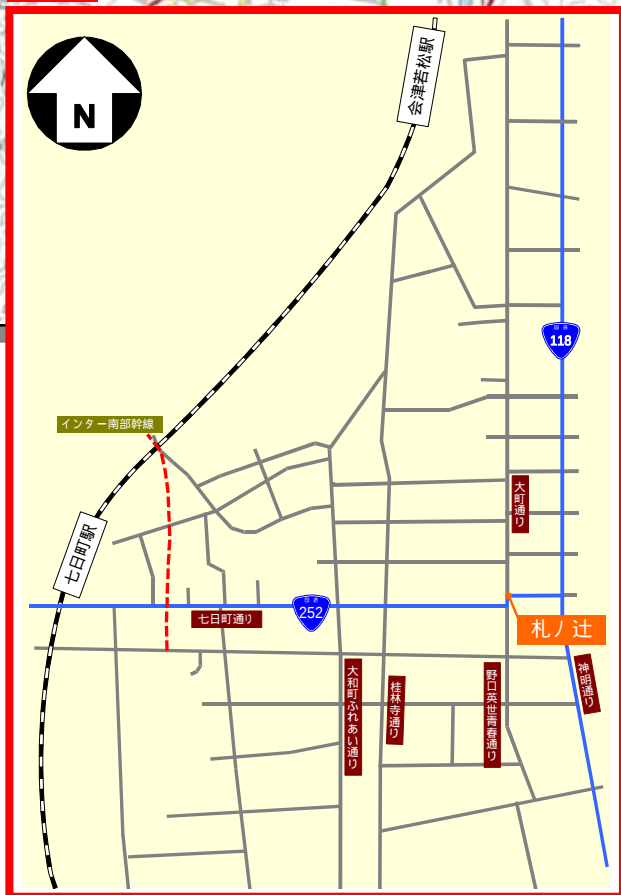
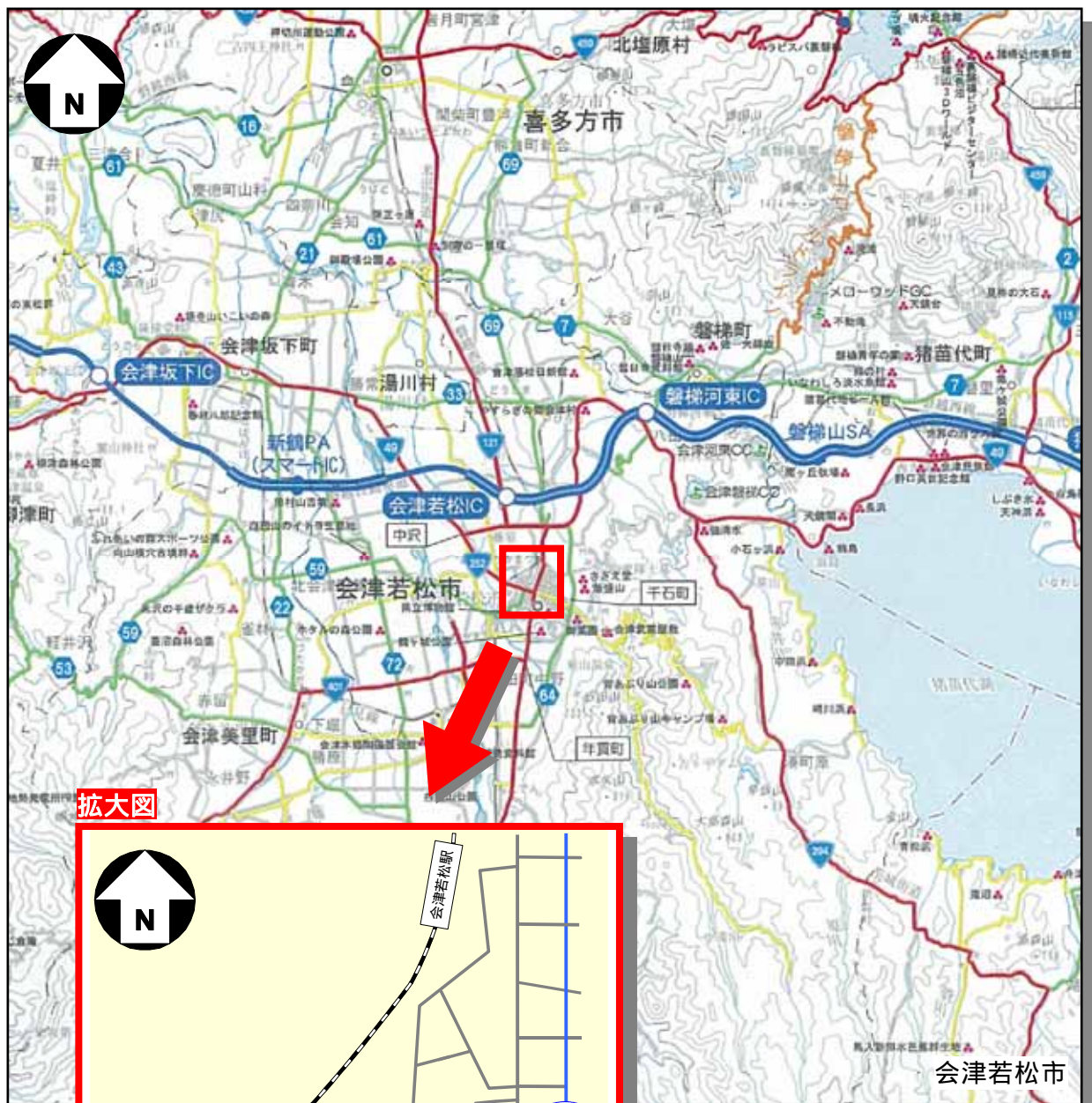
記号： ■ 歴史文化 ● 商人文化 ▲ 生活文化 の分類を示す。

大町四ッ角札ノ辻界限 歴史年表(2/2)

時代	明治	大正	昭和	平成
西暦	一八六八	一九一二	一九二六	一九八九
大町札ノ辻界限の歴史	●小野寺漆器店建設(一八六八) ●渋川問屋創業(一八六八) ■神明神社移築(一八七二) ■神明神社改名(一八七三) ■阿弥陀寺に御三階移築(一八七四) ●大島半兵衛商店建設(一八七七) ■西蓮寺再建(一八七八) ■東明寺移転、延命地藏尊のみ残る(一八八三) ●熊野屋菓子店創業(一八八七) ●満山貞吉商店建設(一八八八) ●松村金物店創業(一八八九) ▲若松栄町教会創立(一八九四) ■田中稲荷神社再建(一八九九) ●山田木綿織元創業(一九〇五) ●庄助製菓本舗(一九〇七) ●現在の藤白木屋漆器店建設(一九一四) ●福西本店建設(一九一四) ■神明神社、社殿再建(一九一五) ●永山陶器店建設(一九一六) ●福西惣兵衛商店創業(一九一九) ▲羽金家住宅建設(一九二〇) ▲旧郡山商業銀行若松支店建設(一九二二) ▲会津銀行社屋建設(一九二七) ▲菊地金粉製作所建設(一九三六) ▲旧黒河内胃腸病医院建設(一九三六) ●白虎最中本店創業(一九四〇) ■神明神社移転(一九四五) ■威徳院に稽古堂址碑移転(一九四八) ●福西惣兵衛商店改組(一九四九) ■神明神社、神楽殿移築(一九七〇) ■見性寺再建(一九七三) ■威徳院に庫裡、客殿建立(一九七八) ■常光寺再建(一九七九) ■田中稲荷神社でほおずき市開催(一九八六) ●アイハッセオープン(二〇〇二) ●会津ブランド館オープン(二〇〇四) ●野口英世青春広場オープン(二〇〇五)	戊辰戦争の始まり(一八六八) 会津藩は降伏開城(一八六八) 若松県設置(一八六九) 若松が町制施行される(一八八九) 若松が市制施行される(一八九九) 若松、喜多方間の岩城鉄道が開通(一九〇四)	若松駅が会津若松駅に改名(一九一七) 岩越鉄道 平、新津間全線供用(岩越線に改称) (一九一七) 会津線が上三寄まで開通(一九二七) 会津線が田島まで全線開通(一九三四)	会津若松から浅草まで鉄道開通(一九八六)

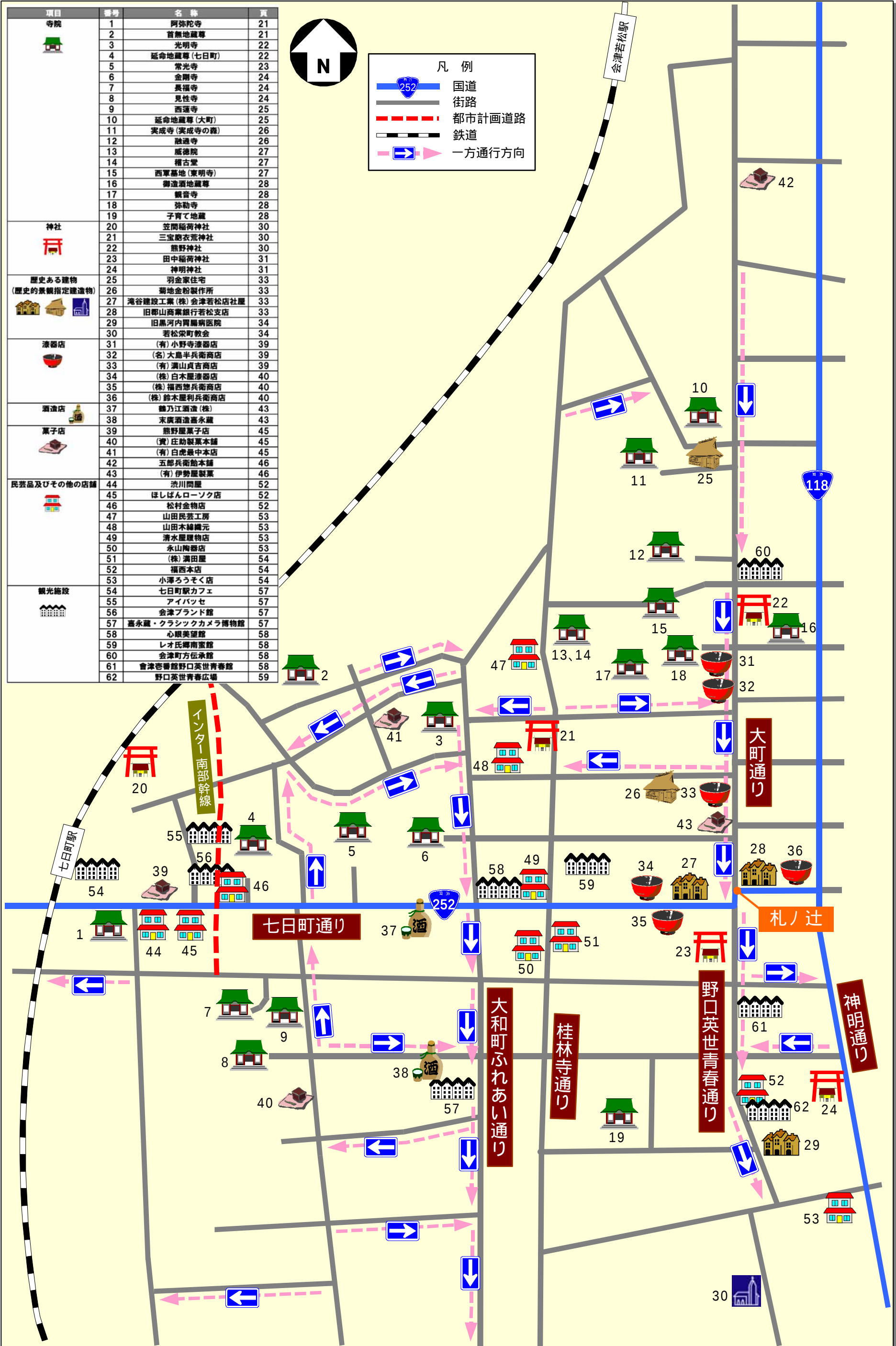
記号： ■ 歴史文化 ● 商人文化 ▲ 生活文化 の分類を示す。

< 大町四ッ角札ノ辻界隈の位置図 >



札ノ辻界隈拡大図

< 地域資源マップ >



1 . 歷史文化

1-1 会津若松の町割

会津若松で本格的な町割りが行われたのは、藩主が蒲生氏郷の時代であった。氏郷が奥羽の仕置後に城下町の本格的な経営に着手した時点より始まったといわれている。

若松城下は複数の川からつくり出された複合扇状地の上にある。城下の東から車川、羽黒川（のちの湯川）が流れており、氏郷はそのうちの車川を堰き止めて外濠に利用したと伝えられる。市街地の標高は約 210～230m であり、全体に西南西方面に緩やかに下っており、南北よりも東西方向の勾配がやや急な地形となっている。城下の範囲は、南北約 3km、東西約 4.2km に及び、その南側に城が位置していた。

新しく誕生した侍の住む町である郭内部分は、東西約 2km、南北約 1.8km の範囲の十字街で構成されており、郭内の東西に割り出された道は「^{ちよう}丁」と呼ばれ、南北の道は「^{とあり}通」と呼ばれた。この時代（1592 年）以前の町として形の残ったのは天寧寺町だけであったといわれている。

城の周囲には深く濠をめぐらして、16 の郭門により町人らの住む郭外へとつながっていた。郭外北口から一直線に日野町（のちの甲賀町）が割り出され、西には地元商人らを置く馬場町や大町が割り出された。町方の中心として大町四ッ角札ノ辻（以下「札ノ辻」とする）の南東角には葦名時代からの商人司築田氏が、北東角には氏郷の町造りに功労のあった倉田氏が、それぞれ町検断として大きな屋敷が与えられ町方の中心をなした。

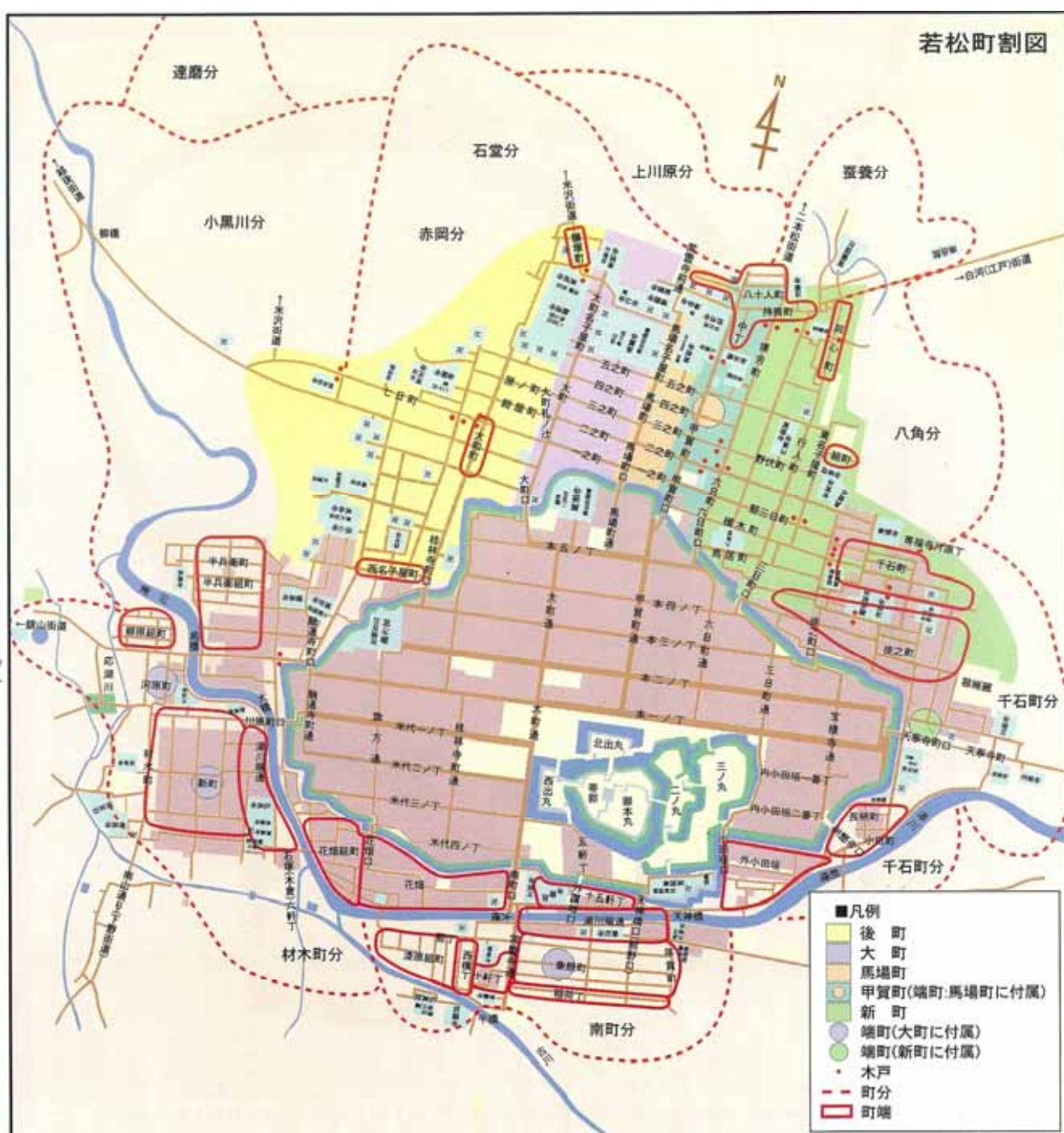


図 1-1-1 若松町割図

(1) 主な町の概要

< 蒲生氏郷により割り出された町 >

1) 後町

氏郷の町割りで置かれた町であり、諏方神社の後方にあたることから「後町」といわれている。桂林寺町、七日町などの 14 の町が属していた。

後町の呼び名は明治初めまで使用されており、町の真ん中に川が流れていたといわれている。

2) 大町

葦名時代には城の西、米代一之丁にあり、商人の住む町であった。氏郷の町割りにより現在地に移ったといわれている。また、領主からの掟、条目などのお達しの木札が掲げられていたことで、東の一之町、西の七日町と交差する所が札ノ辻といわれていた。

▼大町付近



3) 日野町

近江日野より氏郷に従って来た商人や職人、家来たちを住ませたことから名付けられた。加藤嘉明は「日野町は火の町に通じる」として嫌い、同じ近江国の郡名をとり甲賀町と改めた。加藤時代に若松城への正門が東の天寧寺町口から北の甲賀町口に変更されたため城下の大手筋としてにぎわっていた。

▼甲賀町付近



4) 馬場町

葦名時代に城の近くに犬追物の馬場があり、その馬場に続く町ということで名付けられた。その後、氏郷の町割りで郭外に移された。

▼馬場町付近



5) 新町

氏郷の町割りで新設された町で、日野町（後の甲賀町）より東の町の総称であった。六日町、博労町など 18 の町が属していた。

6) 名子屋町

城下の町端には「名子」の付く町が、「大町名子屋町」、「馬場名子屋町」、「東名子屋町」、「西名子屋町」の 4 つ存在した。「名子」とは侍に仕える下級侍や雇用人を意味し、この区画に住居を構え一つの町を形成していた。

(2) 札ノ辻界隈の町の概要図

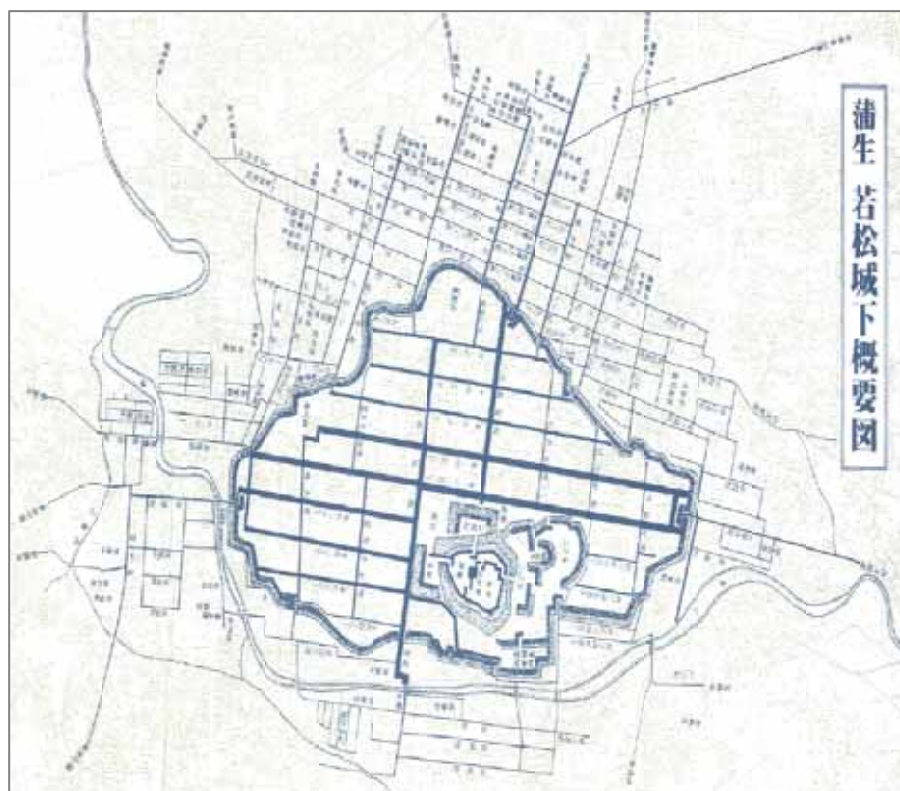


図 1-1-2 蒲生 若松城下概要図

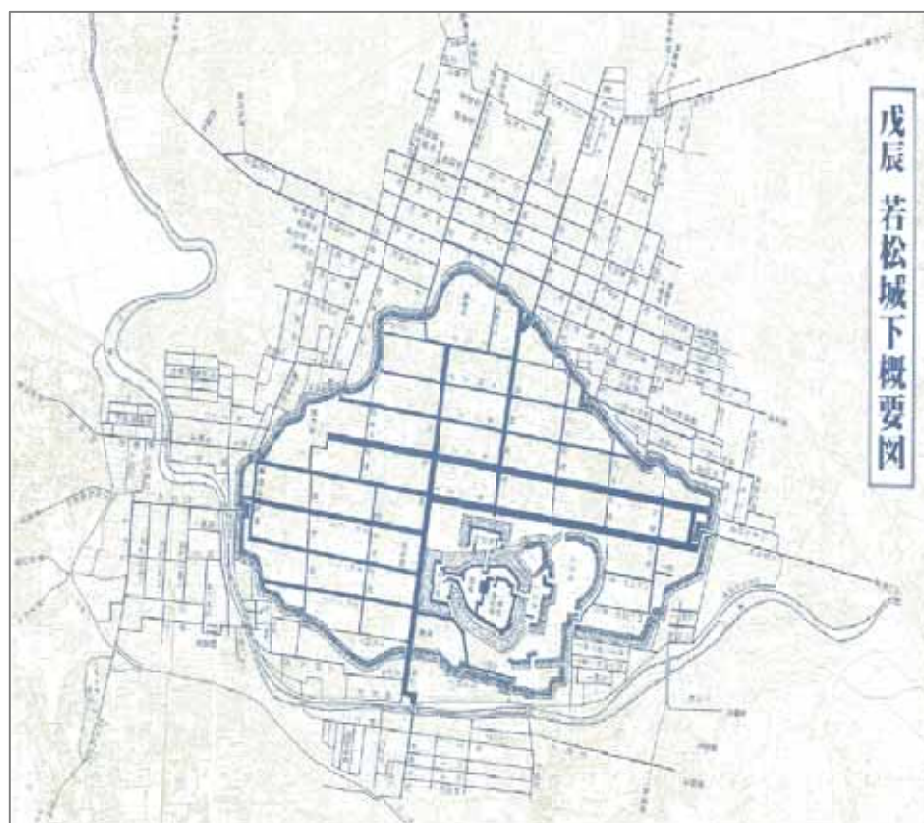


図 1-1-3 戊辰 若松城下概要図

1-2 町名の由来

1) 大町

葦名時代のメインストリートであることから大町という名が付けられた。葦名時代には大町は米代一之丁の地にあったと言われている。

蒲生時代に、諸士の屋敷を郭内、商工人らを郭外に町割した際、米代の大町も現在地に移された。

札ノ辻の南角には葦名時代からの商人司築田家が、北角には蒲生の城郭修理や町割りに協力した倉田家が大きな屋敷を与えられ、大町組の検断として町の自治を務めた。蒲生は六斎市を定め毎日何処かの町で市が立つようにし、大町は5、10日に市が立ち、年初めの1月10日には初市が毎年行われた。

▼大町



2) 七日町

七日町の名は「会津風俗帳」によれば、月々七の日に市が立ったので、七日町になったといわれており、六斎市になる以前の市である。

越後街道、米沢街道に続く町であり、旅籠屋、商人が多く、市内の中でも特に賑わった町であった。

七日町の町名を存続することを住民が強く主張し、1967年(昭和42年)8月の新住居表示では桂林寺町の角から東は大町一丁目となったが、西は七日町の町名がそのまま残された。

▼現在の七日町



3) 北小路町

耶麻郡新宮庄で新宮氏が栄えていた頃、新宮村の辺りに馬場小路、高野町、北小路、湯野小路などという小路があった。1420年(応永27年)新宮城陥落の後、北小路、道場小路などが会津黒川(現会津若松市)に移されたといわれているが、詳細は不明である。

蒲生の町割以前は、北小路町は越後街道、米沢街道に続く主要な道路であった。新住居表示により、桂林寺町より東の道路南側は中町、北側は大町一丁目、桂林寺町より西の南側は日新町、北側は七日町となった。

▼現在の旧北小路町



4) 桂林寺町

その昔、この町に時宗桂林寺という道場があったことからこの名が付けられた。寺の所在地は詳らかではない。

新住居表示により道の西側は日新町、東側の北部は中町、南部は西栄町に変更された。

▼現在の旧桂林寺町



5) 老町

その昔、この町内に3階の楼があり、楼町と呼ばれていたという。楼とは何層にもなった建物等を意味するが、どのような建物があったかは不明である。

その後、楼町と呼んでいるうちに、類韻によって楼が老になってかわり、老町となり、やがて、老を「おとな」と読むようになって「おとなまち」となったといわれている。

その後、新住居表示により中町となった。

▼現在の旧老町



6) 針屋町

その昔、この町に針師（針工）を多く住まわせていたことから、この名が付けられた。新住居表示により日新町に編入された。

▼現在の旧針屋町



7) 大和町

その昔、葦名盛氏の家臣、佐瀬大和の郎従達が居住していたことから名付けられた町であり、佐瀬氏は葦名四天の宿老といわれる人であった。

大和町は、上大和町、中大和町、下大和町に区分され、上大和町は当麻町の北から針屋町に至る間、中大和町は針屋町から七日町の間、下大和町は中大和町の北から田圃に至る間であった。

新住居表示により上大和町は日新町に、中、下大和町は七日町に編入された。

▼現在の旧大和町



8) 紺屋町

この町ができた頃、紺掻きが多く住んでいたため、この名があるといわれている。紺掻きとは古語辞典によると「藍で布地を染めること。またはそれを業とする者。染め物屋。紺屋のこと。」とある。

江戸時代になると塗師も多く居住するようになり、町の様相にも変化があったようである。現在は、紺掻きの面影を残す家は一軒もなく、塗師関係の職人が多く居住している。

新住居表示により旧後分通りから西は七日町に編入し、東は大町一丁目となった。

▼現在の旧紺屋町



9) 後分町

桂林寺町の北方、つまり町末の方に人家が建ち続けられていき、桂林寺町の後の分ということから、「後分」と呼ばれるようになった。

1873年（明治6年）に「之」の字が添えられて、「後之分町」となり、新住居表示により道路の東側が大町一丁目、西側が七日町に変更された。

▼現在の旧後分町



1-3 みち

(1) 街道

戦国時代には既に、伝馬を継ぎ立てる集落が休泊施設をもつ宿駅制度として成立していた。戦国大名（特に織田信長、豊臣秀吉）は総力戦を勝ち抜くために富国強兵政策の一環として、交通網や施設の充実を図り、道路の新設・改修等を積極的に行っていた。

これらは徳川幕府によって継承され、江戸への各大名の参勤交代が強化されると共に、諸国から江戸への街道と宿駅の制度が整備された。以来、運輸・通信を統制する連絡網・街道が全国に張りめぐらされたのである。

街道といえば東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中の五街道であり、この五街道とその付属の道以外を脇往還、脇街道などといい、勘定奉行の支配するところであった。これらの街道に次ぐのが諸藩内の街道であり、城下町を中心にして放射状に数本あり、その街道上にある在町を横道で相互に結んで交通網が形成されている。

会津から江戸への道は戦国期から通じていたが、これら街道、宿駅の整備が制度的にも進められたのは保科正之が領主となって以後（1643年以降）のことである。

近世会津の街道は「本道五筋」といわれ、概要は以下のとおりである。

- 白河街道　；若松居城より江戸へ約260km
- 南山通り　；江戸へ約246km、会津西街道・下野街道ともいう
- 越後街道　；若松より、新発田へ約92km
- 二本松街道；若松より二本松へ約60km
- 米沢街道　；若松より米沢へ約56km

これらの街道の起点は大町一之町の四ッ角であり、制札場があるので札ノ辻ともいわれた。上記五街道の一里塚は全てこの札ノ辻を起点として里程が定められた。

領主の参勤交代は江戸時代初期には主に南山通りを利用したと考えられるが、1683年（天和3年）日光大地震による山崩れで通行が不能になったため、以後、白河街道が参勤交代の際に利用されていた。



図 1-3-1 会津から各地へ向かう街道図

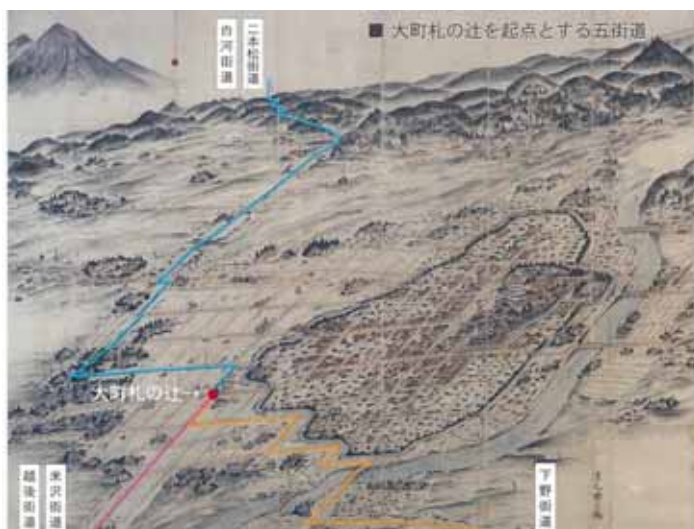


図 1-3-2 札ノ辻を起点とする五街道

(2) 札ノ辻界限に関係の深い街道等

1) 越後街道

白河街道の延長であり、越後新発田への道でもあり、越後では会津街道と呼ばれていた。新発田藩、村上藩の参勤交代や佐渡金山関係の往還に利用されたことに加え、日本海沿岸の海産物や文化を会津へ導入した重要な街道であった。

越後街道の道筋は、1611年(慶長16年) 会津大地震で山崎新湖が出来たこと、勝負沢峠が山崩れによって通行不能となったことにより、一部変更された。

▼越後街道の石畳



2) 米沢街道

上杉氏の城下米沢への道であり、米沢からみれば会津への道、会津街道であった。この街道が顕著に利用されるようになるのは戦国時代以来続く大名同士との関係からである。対外的な軍事は勿論、政治、経済等の面から若松と米沢を結ぶ重要な街道であった。距離が56kmと短く、現在よりも親近性があった街道であり、大名の国替え、巡見使に利用されるなど、定期的ではなく、臨時的な通行で記録に残る街道である。

この街道の熊倉までの経路は上街道、中街道、下街道に分かれていたが、1608年(慶長13年) 蒲生秀行の時に、上・中街道が廃止された。

▼米沢街道の一里塚



3) 南山通り(下野街道)

江戸への最短経路であり、当初は南山通りと呼ばれていた。田島地方では日光街道、関東では会津西街道とよばれたが、その後、会津藩では下野街道と呼ばれるようになった。

峠の多い街道であったが、奥州仕置をした豊臣秀吉が京都への帰途に通過した道である。また、藩主の参勤交代や、藩の廻米、天領御蔵入の年貢米の輸送などがあり、南山地方の産物を若松城下へ、あるいは江戸へ送る道であった。

しかし、この街道が参勤交代等に利用されたのは1680年(延宝8年)までの21回と、1800年頃(文政期)の1回のみである。

この街道は山岳地帯を通過するため、地震等の山崩れの災害が多く1659年(万治2年)の地震で一時不通となったが、間もなく開通した。しかし、1683年(天和3年)の地震で日光領戸板山の山崩れにより突然五十里湖が出現し、街道は不通となった。その後、江戸へは白河街道が利用されることとなった。

4) 白河街道

白河と会津を結ぶ街道は中世、あるいはそれ以前からあったといわれている。1545年(天文14年)に葦名盛氏が勢至堂峠を切り開き、勢至堂村を開設したことにより、白河への街道が、ほぼ出来上がったものと考えられている。

1590年(天正18年)には豊臣秀吉が奥羽仕置のため若松入りした際に利用した。その後、1683年(天和3年)南山通りが不通となった時から会津藩主の参勤交代のための街道となった。また、新発田、村上両藩主の参勤交代、諸国巡見使、ときには佐渡金山からの金の輸送路として、江戸への廻米の道として利用されており、会津藩にとって重要な街道であった。

5) 二本松街道

上街道と下街道の2つがあり、本街道は下街道と呼ばれ、大寺宿から猪苗代に達する。一方、上街道は滝沢峠を越え強清水を抜け、猪苗代湖畔を通り猪苗代宿に至る。

この街道は若松城下から中通りへの道筋として、また藩祖正之の墓と正之を祭る土津神社参詣や支城猪苗代城の往還路として重要な街道であった。

6) 札ノ辻

会津の「本道五筋」の起点となったのが札ノ辻である。

札ノ辻は制札場でもあり、1643年に保科正之が初めて制札を掲げた。また、1645年から1745年までの100年間に16回の火災があり、一度に500軒以上の家屋が類焼した火災が7回発生した。防火対策として1674年に、札ノ辻に火の見櫓が建てられた。

さらに、室町時代の葦名直盛、もしくは蒲生氏郷の時代から始められたと伝えられている十日市も、古くは札ノ辻を中心として大町通りで行われており、明治維新前までは札ノ辻で俵引が行われ、町検断倉田氏の屋根から俵が落とされ、下で待ち構えていた上町・下町の若衆達が裸になり引き争っていたといわれている。

▼札ノ辻



(3) 交通

1868年(明治)以来、乗り物といえば、人力車が乗合馬車と相場が決まっていた。乗合馬車はいわゆるトテ馬車で若松・坂下間を「トテ！トテ！」とラッパを鳴らしながら走っていた。当時の道路は真ん中に川が流れていたこともあり、柳の木がそよそよと風流な情緒を醸し出していた。

しかし、鉄道の開通や自動車の普及により道路や橋の改修が行われ、1935年(昭和10年)には現在のような舗装道路となった。

1 - 4 地域の変遷

(1) 中世（～ 葦名時代）

1) 会津のおこり

「会津」という地名の由来は「古事記」によると、高志道（北陸道）の東方にそれぞれ派遣されていた父子が会った場所を「相津」と呼ぶようになったと記述されている。

2) 古代

5～6世紀頃の会津盆地は謎の多い時代であるが、8世紀（718年）には陸奥国より石城・石背2国が分置され、会津郡は石背国に属していたといわれている。



図 1 - 4 - 1 8世紀初めの陸奥国

3) 源平時代

源平時代の争乱時代には、藤原秀衡の陸奥守就任により、会津地方は奥州藤原氏の支配に組み込まれていたと伝えられている。やがて、奥州藤原氏が源頼朝に滅ぼされ鎌倉に武家政権が誕生すると、会津盆地は新たな歴史を歩むこととなった。

4) 鎌倉時代

鎌倉時代、葦名氏の祖にあたる佐原義連が源頼朝から会津を賜ったのが会津支配の始まりと伝えられている。佐原義連の四男である光盛は会津葦名の初代で、13世紀後半に活躍した人物である。この葦名氏が南北朝時代以降勢力を拡大するが、鎌倉時代における動静と所領については不明となっている。

5) 室町・南北朝時代

建武政権成立直後には北条氏一門の掌握していた会津地頭職が新田氏一族の岩松経家に与えられているが、南朝方の劣勢とともに消滅してしまう。

南北朝内乱状況の中で、後に戦国大名として成長する葦名氏がこの地域の歴史の舞台に登場する。葦名氏は三浦一族の佐原盛連の後裔が三浦郡葦名郷（神奈川県横須賀市）を所領として相続し、名字を葦名にしたことに始まる。その後、直盛の時に鎌倉から初めて会津に下向したといわれている。

6) 戦国時代

葦名氏が勢力を拡大してゆく過程においては、会津郡守護という地位の獲得が重要であり、1434年(永享6年)に葦名盛久に陸奥国会津郡守護職が譲られている。

南奥では白川氏、伊達氏、葦名氏がそれぞれ地域に基盤を築き、地域権力者として成長していき、会津の地においては、葦名氏がその地位を確立した。葦名氏は西暦1589年に摺上原の合戦で伊達政宗に敗れ、葦名氏は滅亡した。その後、伊達政宗が会津黒川に入り会津地方を統治した。



図 1-4-2 戦国時代の南奥の諸勢力と城館

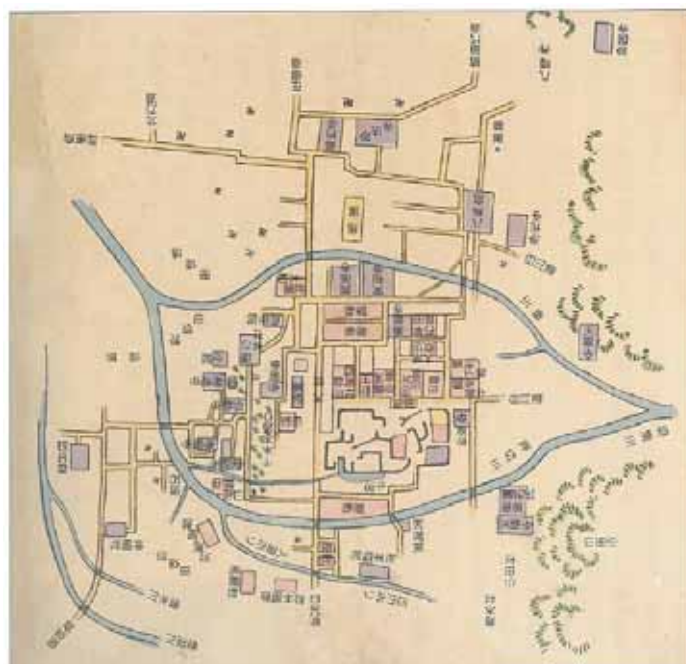


図 1-4-3 葦名時代の札ノ辻界隈周辺

(2) 近世(蒲生時代～戊辰戦争)

1) 蒲生氏郷による近世会津の幕開け

豊臣秀吉は伊達政宗から会津黒川を没収し、蒲生氏郷に松坂から会津黒川への国替えを命じた。蒲生氏郷は城下の町割り、築城等を行った。



図 1-4-4 蒲生年代 若松城下概要図

▼ 鶴ヶ城跡碑



ホテルニューパレス前

2) 「若松」「鶴ヶ城」の由来

蒲生氏郷が「黒川」の地名を「若松」に改めた。そのいわれは氏郷の生まれ故郷にあったという「若松の森」から名付けたものといわれている。「氏郷記」によると蒲生家にとって松は縁起のよい文字であり、更に、氏郷の幼名は鶴千代、蒲生家の家紋も鶴を描いたものであることから、氏郷が新たに開いた町の名に若松、お城の名を鶴ヶ城と命名したといわれている。

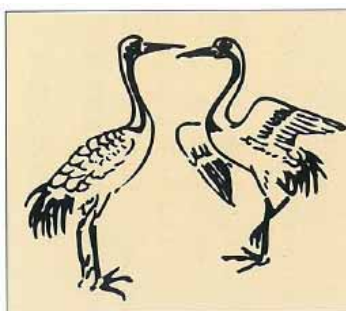


図 1-4-5 立鶴紋

3) 上杉景勝会津に入る

1595 年（文禄 4 年）に蒲生氏郷が死去し、蒲生秀行に封を継がせた。しかし、1598 年（慶長 3 年）豊臣秀吉は蒲生秀行を宇都宮に移し、上杉景勝を会津 120 万石に封じた。



図 1-4-6 上杉時代領主配置図

4) 蒲生秀行会津に帰る

関ヶ原の戦いで徳川家康に味方した蒲生秀行は 1601 年（慶長 6 年）年再び会津領主として封じられた。



図 1-4-7 蒲生秀行領地図 60 万石

5) 加藤時代の会津

1612年(慶長17年)に蒲生秀行が死去し、その後を継いだ子、忠郷が1627年(寛永4年)年に亡くなった。無嗣のために会津60万石は収公となり、改めて弟忠知に松山24万石が与えられたのである。しかし、忠知も1634年(寛永11年)に急死し、またしても嗣子がなく、蒲生家の血筋は完全に絶えた。その後、加藤嘉明が会津40万石の領主として移された。



図 1-4-8 加藤時代領地図 40 万石

6) 会津藩のなりたち

加藤嘉明の没後、その嫡子式部少輔明成が相続を許された。明成は若松城を大改修し、これまで東にあった大手門も北出丸に変更され、城下の中心街に向かって開かれることとなった。

しかし、明成は家臣の堀主水事件もあり1643年(寛永20年)に40万石を没収され、若松城には保科正之が入城した。

保科正之は、札ノ辻に初めて制札を掲げ、幕藩体制が確立し、武断政治から文治政治へと移行し、法治主義による政へと進む具体的な施策が次々と実施された。その他、街道の整備、漆と蠟を藩の専売とし、六斎市を開くことにより、商業も発達していった。

また、新田開発にも熱心に取り組み、用水堀の工事が並行して行われるとともに、堰の開削が同じく進められた。その後、1852年(嘉永5年)に松平容保が9代目として襲封した。



図 1-4-9 保科正之画像

7) 松平容保京都守護職を拝命

1862年(文久2年)8月1日、松平容保は京都守護職を拝命、官位は正四位下となり、役料5万石と上洛費用3万両が幕府から貸与された。同年12月9日、江戸を出発した松平容保は精兵1千名を引きつれ24日午前9時、三条大橋を渡り京都に足を踏み入れた。

8) 戊辰戦争

1868年(明治元年)1月3日、鳥羽・伏見の戦いにより、戊辰戦争が始まった。会津、桑名、見廻組、新選組等の旧幕府軍1万5千人は新政府軍5千人に破れた。

その後3月以来、各地で旧幕府軍と新政府軍は戦いを行ったが、8月23日、会津藩は戸ノ口原の戦いに敗れ、新政府軍の若松城下への進攻を許すこととなる。その際、白虎隊士らは飯盛山で自害する。8月26日、新政府軍は小田山に砲列を敷き、城内への砲撃を開始した。9月14日には再度小田山からの砲撃があり、多大な被害を受けた。その後9月22日に北追手門前へ「降伏」と大書きされた旗がたてられ、翌日には若松城が引き渡された。



図 1-4-10 砲弾を受けた鶴ヶ城

1-5 昔のまちなみ

(1) 大町四ッ角札ノ辻

札ノ辻

< 昔 (明治末) >



< 今 (平成 17 年) >



(2) 大町通り

大町通り

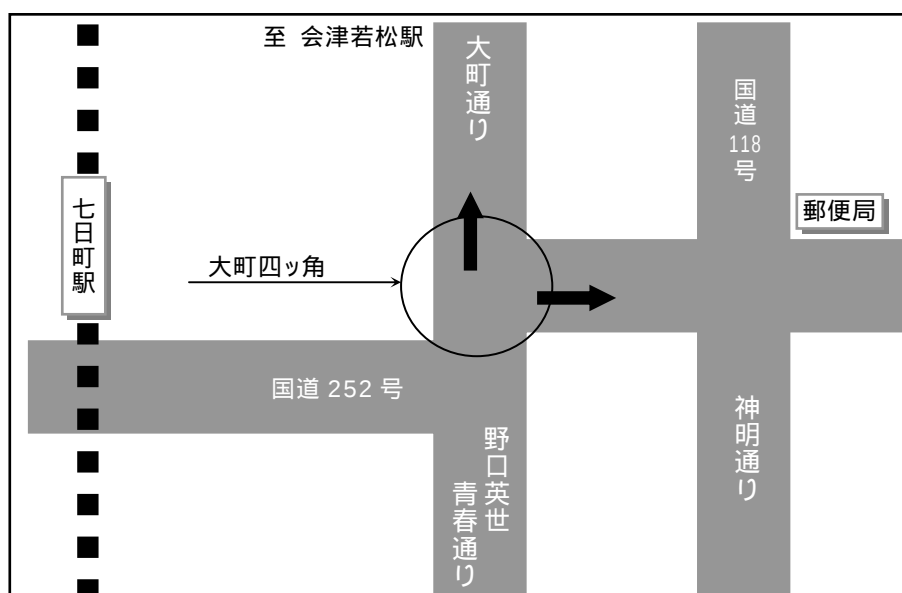
< 昔 (昭和初期) >



< 今 (平成 17 年) >



< 撮影位置 >



(3) 七日町通り

塚原呉服店前（西向き）

< 昔（昭和初期） >



< 今（平成 17 年） >



七日町駅から札ノ辻方面を見る

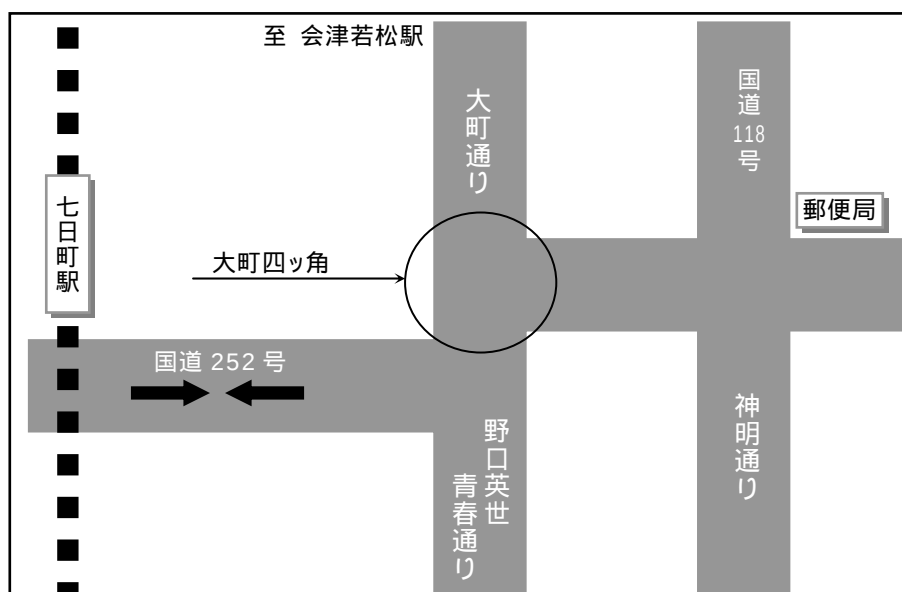
< 昔（昭和中期） >



< 今（平成 17 年） >



< 撮影位置 >



1-6 神社仏閣

(1) 寺院

1) 阿弥陀寺(浄土宗)

< 鶴ヶ城に関わる唯一の建物 >

1603年(慶長8年)に良然が会津に来た際、蒲生秀行の援助を受け建立した。

当時としては、城下に類のない程壮観であったが、火災のため焼失した。その後、開宗800年を記念し現在の堂宇を建立した。また、町廻り33観音の24番札所になっている。

境内の御三階は鶴ヶ城本丸にあった建物で、1874年(明治7年)の鶴ヶ城取り壊しの際、本寺に移築された。建物の外観は3層であるが、内は4階になっており、鶴ヶ城に関して現存する唯一の建物といわれている。

境内の台座にあった大仏は1767年(明和4年)の鑄造によるもので、もとは飯盛山下にあったもので、西軍が持ち運ぼうとするとところを七日町の住人が引き取ったといわれている。また別の説では、明治初年、祭政一致をスローガンとする政府の神道国教化政策・神仏分離政策によってひきおこされた仏教排斥運動の際に、飯盛山より持ち運ばれたとも言われている。しかし、第2次世界大戦時の金属類回収令により供出された。

また、この寺には長命寺同様、戊辰戦争の会津藩士戦死者の内の1281体が埋葬されている。さらに新選組の斉藤一も東軍(幕府軍)に与した殉職者として当寺敷地内に埋葬されている。また当時、戦死者達の墓標は建てたが、民政局に取除きを命ぜられたといわれている。現在の墓標は1873年(明治6年)に建てられたもので、春秋2季(4/23、9/23)に墓前祭が行われている。

▼ 御三階



▼ 阿弥陀寺の大仏
(昭和初期)



▼ 台座(平成17年)



2) 首無地蔵尊

< 子供の健やかな生育を願う地蔵尊 >

今から約260年程前のある日、近くの農家の嫁が赤ん坊を背負って一心不乱に田植えをしていた。日暮になって我に返ると、背中の赤ん坊が首を後に垂れて息を引取っていた。その子を哀れと思い、建てられたのがこの首無地蔵さまである。

子供の健やかな成長や夜泣きに困る子供、また、就職進学に首が落ちないようにと願う人たちがお参りに訪れている。4月24日が例祭が行われている。

▼ 首無地蔵尊



3) 光明寺(曹洞宗)

<浄土真宗西本願寺の末寺>

浄土真宗西本願寺の末寺で車川山と号し、1588年(永禄元年)慶了という僧が開基した寺で、はじめは郭内五之丁の地にあったが、1591年(天正9年)大和町より高久組に至る通りの北側、現在地に移された。

▼ 光明寺



4) 延命地蔵尊(七日町)

<子守り地蔵尊として信仰される>

1601年(慶長6年)越後国の僧(弘信)が、この地に自在院の末寺「長命山吉祥院」を建立し、本尊地蔵尊を安置し、以来、六道教化の菩薩としてどこへでも出向いて我々民衆を救済する役をおつてきた。戦後、宗教法人の法律の改定により、吉祥院は登録されなかったため、現在は、七日町五丁目の有志により維持・管理されている。

特に、地蔵尊は「子守り地蔵尊」として近隣の信仰を集め毎年7月23日に開催される地蔵尊祭礼には子供の健やかな生育を願う多くの人々に参拝されている。しかし、昔の祭礼は6月23日に行われ、会津若松市のお日市が7月からであり、今も会津若松市のお日市には載っていない。

また、1906年(明治39年)に起きた当時の大火の際、地蔵尊は衆生の代わりに炎を受け、火を治めたということで「火伏の御利益」もあるように伝えられている。実際に、現在安置されている地蔵尊の半分が焼けたままとなっている。

昔は、寺の裏側に広い墓地があり、そのため火が広がらず、火災が治まったといわれているが、裏側の墓地は1937~1941年(昭和12~16年頃)の墓地整理により移動された。

さらに、境内には明治、大正、昭和と3時代に渡って活躍した近代会津を代表する日本画家「野出蕉雨」自筆の筆扇塚と門人たちの建てた頌徳碑がある。また、この頌徳碑の脇には松尾芭蕉が読んだ「句碑」もある。

▼ 延命地蔵尊全景



▼ 延命地蔵様



▼ 筆扇塚



【住民の思い、思い出 (七日町 横山さん)】

旧磐見町に遊郭があった時代には若い女性達がよく参拝し、露店が並び、また盆踊り等も行われるなど、賑わった時代もありました。

私の小学生時代には、近所に子供が多数いましたので、境内で「かくれんぼ」や「雪合戦」等をしてよく遊んだものです。



5) 常光寺(天台宗)

<めぐり合観音堂と2階造りの本堂があるお寺>

開祖は明らかでないが、1623年(元和9年)に今の天台宗に改められた。数度の火災により消失しており、1866年(慶応3年)、1979年(昭和54年)に増改築されている。

中には広い駐車場があり、右側に古峯神社(石碑)、その後、稲荷観音堂、めぐり合観音堂があり、本堂の前には寛永寺燈籠がある。

本堂の中には本尊として阿弥陀如来が祀っており、右側に虚空蔵尊後には位牌堂が連なっている。2階には書院があり、寺院建築ではめずらしい2階造りの本堂である。

境内は古くから城下の人々に開放されており、1791(寛永3年)には劇場人形座が設置され、その後も見世物小屋、相撲、サーカス、移動動物園、植木市等が開かれ、夏には盆踊りも行われていた。

▼ 昔の常光寺



▼ 常光寺



【古峯神社】

農業、火防(ひぶせ)の神様であり、以前は真船酒店と横山自転車店の間に建っていたが、真船酒店の改築により現在地に移った。

【めぐり合観音堂】

縁起によれば、家出した子供を捜していた宇治の茶造りの商人が若松に寄り常光寺を訪ねお茶を飲ませてもらうと、そのお茶が宇治の自分の造っていたお茶と同じ味であり、親子がめぐり合った。観音様の御利益とお堂を建てて祀った。

【福満虚空蔵尊】

城主であった加藤嘉明の守本尊で、公の兜にあり松平家の時に郭内の延壽寺というお寺の護摩堂に本尊として安置され、歴代藩主が信仰された仏様。

言い伝えによると、藩主松平容保公が京都守護職の時、病にかかれ、その夢枕に虚空蔵菩薩が現れ、「七日町、常光寺に遷座せよ」とのおつげにより、1863年(文久3年)に本寺に移されたと言われ、公の病気がなおったといわれている。

【住民の思い、思い出 (七日町 塚原さん)】

今の駐車場になっているところには、昔、砂場等もあり、子供時代の我々にとっては恰好の遊び場で、よく遊んだ思い出があります。



6) 金剛寺 (真言宗室生寺派)

< 会津真言 4 カ寺の一つ、金銅製双龍双鳥文磬が安置される >

1130 年 (大知 5 年) に現在の恵倫寺に開山した。中世には米代 (城内の地区) にあったが、蒲生氏郷の町割りにより現在地に移った。観音寺、弥勒寺、自在院と並んで会津真言 4 カ寺と称されている。葦名盛久、盛高が僧侶に帰依し、盛舜も寺内の明王坊が買い取った田地を安堵している。

本寺には国の重要文化財に指定されている「金銅製双龍双鳥文磬」が残されており、1293 年 (正応 6 年) に、伴貞吉により製作されたといわれている。磬とは一般に「うちならし」といわれ、石、玉でつくられた中国の楽器であったが、仏具の鳴器に取り入れられた。

この磬は鍍金製、山形が高く、縁が厚く、体の薄い、裾の張りの少ない磬である。

▼ 金剛寺



7) 長福寺 (曹洞宗)

< 安産に霊験のある御姥尊(おんば様)が祀られるお寺 >

1598 年 (慶長 3 年) に守応という僧が開基した。観音堂が境内にあり、堂中に姥神の像「御姥尊」が納められている。

御姥様は普段拝むことができないが、年に 1 回、会津若松市の夏祭りの一つ「お日市」の初日である 7 月 1 日にご開帳される。これは御姥尊の祭礼で「おんば様」と呼ばれ親しまれている。

この観音堂の「姥神」は安産に霊験があるといわれ、若い女性や妊婦、生まれたばかりの子供を抱いた親子が多く訪れる。また、町廻り 33 観音の 25 番札所になっている。

▼ 長福寺



8) 見性寺 (浄土宗)

< 良然が隠居寺として建立 >

浄土宗阿弥陀寺を建立した良然が 1619 年 (元和 5 年) 自らの隠居寺として建立し、1622 年 (元和 8 年) 4 月 10 日、当寺において入寂 (死亡) した。

1631 年 (寛永 8 年) から 1647 年 (正保 4 年) にかけて、会津藩の預かり地御蔵入で切支丹に対する大弾圧があり 30 名が捕らえられ多くの者が獄死した。このとき落合村で捕らえられた小右衛門と作右衛門親子は、1647 年 (正保 4 年) 4 月 12 日に獄死し、当寺に土葬された。戊辰の役では、兵火に罹り、その後再建されたが 1971 年 (昭和 46 年) 3 月に火災に遭い、現在の堂宇は 1973 年 (昭和 48 年) 11 月に再建されたものである。

▼ 見性寺



9) 西蓮寺（真宗大谷派）

< 画僧岩浅松石の菩提寺 >

1574年（天正2年）幽善という僧が京都本願寺に至り、本尊ならびに寺号を受けて当寺を開いた。針屋町の北側にあり、京都東本願寺の末寺で、山号を「小田山」と号した。

1588年（天正16年）伊達政宗入寇の際は難を避けて岩瀬郡田良尾村に移ったが、数年後には本地に還った。

田良尾村には西蓮寺屋敷という旧跡が残っており、今も岩瀬郡や南会津には信徒が多い。1590年（同18年）蒲生氏郷が会津に就封、漆器産業を振興すべく近江国から木地職小椋一族40人呼び寄せた際、当寺の檀家になるよう命じたという。

また松平氏時代、3代藩主正容は6世牧峯に帰依した。当時白藤の庭園があって、毎年花時になると来駕され、また牧峯登城の折り正容自ら法衣や品々を賜ったといわれている。

文化・文政の頃(1804～29)14世常観は寺務を振興して堂宇を再建、寺内は美観を呈したが度重なる火災や戊辰の役で、疎開しておいた数点を残し、什宝ことごとく焼失離散してしまった。本堂は1878年（明治11年）に蔵造りで再建され、書院や庫裡も近年改築されて寺観は一新した。

会津が生んだ画僧岩浅松石の菩提寺にあたり、唐獅子を描いた襖絵が残されている。

▼ 西蓮寺



10) 延命地藏尊（大町）

< 木彫地藏尊が安置される >

1280年（弘安3年）時宗の開祖一遍上人は、白河の関を通り平泉に向かう途中、会津東明寺を開基したが、1883年（明治15年）三方道路の開拓に伴い西軍墓地のある東明幼稚園に移され、現在は地藏堂だけが残されている。

御本尊の木彫地藏尊は相当古いもので建立時期は不明である。家内安全、商売繁盛、福分け、交通安全などを祈願し、住民に親しまれている。また、会津21地藏尊の第6番札所になっている。

連歌師の猪苗代兼載は、「花もみじ 夏こそ盛り庭の松」と詠んでいる。

▼ 延命地藏尊（大町）



1 1) 実成寺 (日蓮正宗)

< 数々の巨木が息づく貴重な樹木がある >

開山は権僧都日尊であり、諸国を遊行して道場を開くこと 36 ヲ寺に及び当寺もその一つで、1303 年(嘉元元年)、葦名遠江守盛宗の内室藤原氏の帰依によって、米代四之丁の地に建てられたものである。

1595 年(文禄 4 年)柳原村に移され、蒲生忠郷の時、当寺の住職日瑤上人が参詣に便利な地を領主に請い、1623 年(元和 9 年)、現在地に拝領した。

会津戦争の際も建物は戦災を免れ、旧観を呈している。

【実成寺の森】 「自然景観指定緑地」

ケヤキをはじめエノキ、サイカチ、イチヨウ、シダレヤナギの巨木が息づく。本堂正面の一对のケヤキは、1615 年に植樹されたと伝えられており、幹周 6m のものも見られる。市街地において多くの巨木が生育する貴重な樹林である。

▼ 実成寺



【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ)】

昔、大きな松の木があり、その名をとって松屋衣料店と名前をつけたと聞いています。

境内には、数年前まで、すべり台やブランコなどがあり、子供達の遊び場になっていました。



1 2) 融通寺 (浄土宗)

< 戊辰戦争時には西軍の本営が置かれたお寺 >

1362 年(康安元年)開山し、当初は郭内にあったが、1592 年(文禄元年)に蒲生氏郷に願い出て現在地に移築された。浄土宗後陽天皇成天皇直筆の扁額、宸翰(しんかん)、勅制文がある。地方には珍しい勅願寺であり、蒲生秀行の菩提寺でもある。子の忠郷は徳川家康と 38 歳で亡くなった母堂(家康の三女振姫)の位牌を安置した。

戊辰戦争時、西軍の本営が置かれ、菊の御紋を掲げていたために焼き討ちを免れ、現在の本堂は当時の面影をとどめている。明治期の民政局・若松県の仮役所でもあり、釈迦と渾名された伴百悦と共に戊辰の役での死者達の弔いに力を尽くした町野主水の墓もある。西軍戦死者の墓標は 151 名におよぶ。

▼ 融通寺



【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ 大町 石善さん)】

60 余年前、「デンソレ、デンソレ」の掛け声で念仏踊りを境内でやっていました。また、演芸会なども行っていました。



1 3) 威徳院 (真言宗豊山派)

< 博労町自在院の末寺 >

開基の年代は不明であるが、昔は郭内諏方神社の辺りにあり、1592年(文禄元年)沙門実尊、蒲生氏に請うて後町に移された。中光山と号し、博労町自在院の末寺真言宗である。現在の庫裡、客殿は1978年(昭和53年)の新築で山門前には「稽古堂址」の碑があるが、もとは隣地にあったものを1948年(昭和23年)に会津史談会がここに移したものである。

▼ 威徳院



1 4) 稽古堂

< 会津初の民間学校 >

1664年(寛文4年)5月、横田俊益が創建した郷学(民間学校)としては、会津で最古のものである。

現在、威徳院の門前に「稽古堂址」の標石が建っており、昔、稽古堂はこの界隈に建てられていた。堂は1689年(元禄2年)、遠方で不便なのを理由に、甲賀町郭門前大工丁入口南角の地に移転させられ、「町講所」と改称、藩の支配を受けるようになり、会津に生まれた初の民間学校はここで幕を閉じることとなった。

▼ 稽古堂址



1 5) 西軍墓地 (東明寺 (時宗))

< 戊辰戦争時の西軍戦死者が多く埋葬される >

戊辰戦争時の西軍戦死者150名が当地に埋葬された。他に実相寺、自在院、専福寺、法華寺などにも埋葬されていた。

当時は西軍の各藩の連絡会議所で軍務局が置かれて、1883年(明治15年)三島通庸県令による三方道路(米沢、日光、越後に向かう)を開くために東明寺管理下に置き現在に至る。

墓域内には柿や梅の木が植えられ、その収穫が維持費に充てられていた。

▼ 西軍墓地



【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ)】

昔も今も毎年10月23日には墓前祭が行われていて、鹿児島や山口県などから、供物が届けられています。



16) 御造酒地蔵尊

< 会津の銘酒をささえる地蔵尊 >

一説によると徳蔵はよく酒をたしなむために人々に「お酒徳」と呼ばれていた。徳蔵は会津の地に般若の池があることを聞いて、そこに堂祠を建て、尊軀を安置した。

この地蔵尊が御造酒地蔵尊と呼ばれ、会津の銘酒を生むようになったといわれている。名酒醸造祈願、家業繁栄、金縁、中風脚気治癒を祈願する。また、会津 21 地蔵尊の 7 番桂松院になっている。

▼ 御造酒地蔵尊



【住民の思い、思い出（アネッサクラブ）】

落慶法要当時は、盆踊りもあり、賑わっていました。



17) 観音寺（真言宗豊山派）

< 会津真言 4 カ寺の一つ、木造馬頭観世音菩薩が安置される >

1392 年（明徳 3 年）に鳥居町に建立した。また、臣・岡崎某が寺領を寄進し、蒲生氏の城郭修理の時に現在地に移った。

金剛寺、弥勒寺、自在院と並んで会津真言 4 カ寺と称され、由緒高い格式を誇っていた。

観音寺には瑠璃光薬師如来が祀られており、7 月 7 日にお日市が開催されている。

また、木造馬頭観世音菩薩が安置されている。全ての人々の煩惱や罪業等を飢えた馬が一心に食い尽くしてしまうところから馬頭の名がついているといわれている。

木造馬頭観世音菩薩は 31.4cm の小さな像であるが、頭髮は逆立っており、頭上には馬頭を頂く。手は 6 本あり、顔は 3 つ、それぞれの顔に目が 3 つあり、いずれも怒りの表情をしている。

▼ 観音寺



18) 弥勒寺・大日如来堂（真言宗豊山派）

< 会津真言 4 カ寺の一つ、胎蔵界大日如来坐像が安置される >

1425 年（応永 3 2 年）に僧秀哉が建立した。葦名盛政の寄進した大般若経を伝えたお寺で、当時は諏方神社の周辺にあったが、後に現在地に遷された。また、町廻り 33 観音の 18 番札所になっている。

本堂に安置されている胎蔵界大日如来坐像は像高 54 cm の仏像があり、家内安全、身体堅固などを祈願する。また、7 月 8 日にはお日市が開催されている。

▼ 弥勒寺



19) 子育て地蔵

< 子育てに御利益のあるお地蔵様 >

明治維新までは現在の野口英世青春広場に 7 つくらい存在した。

▼ 子育て地蔵



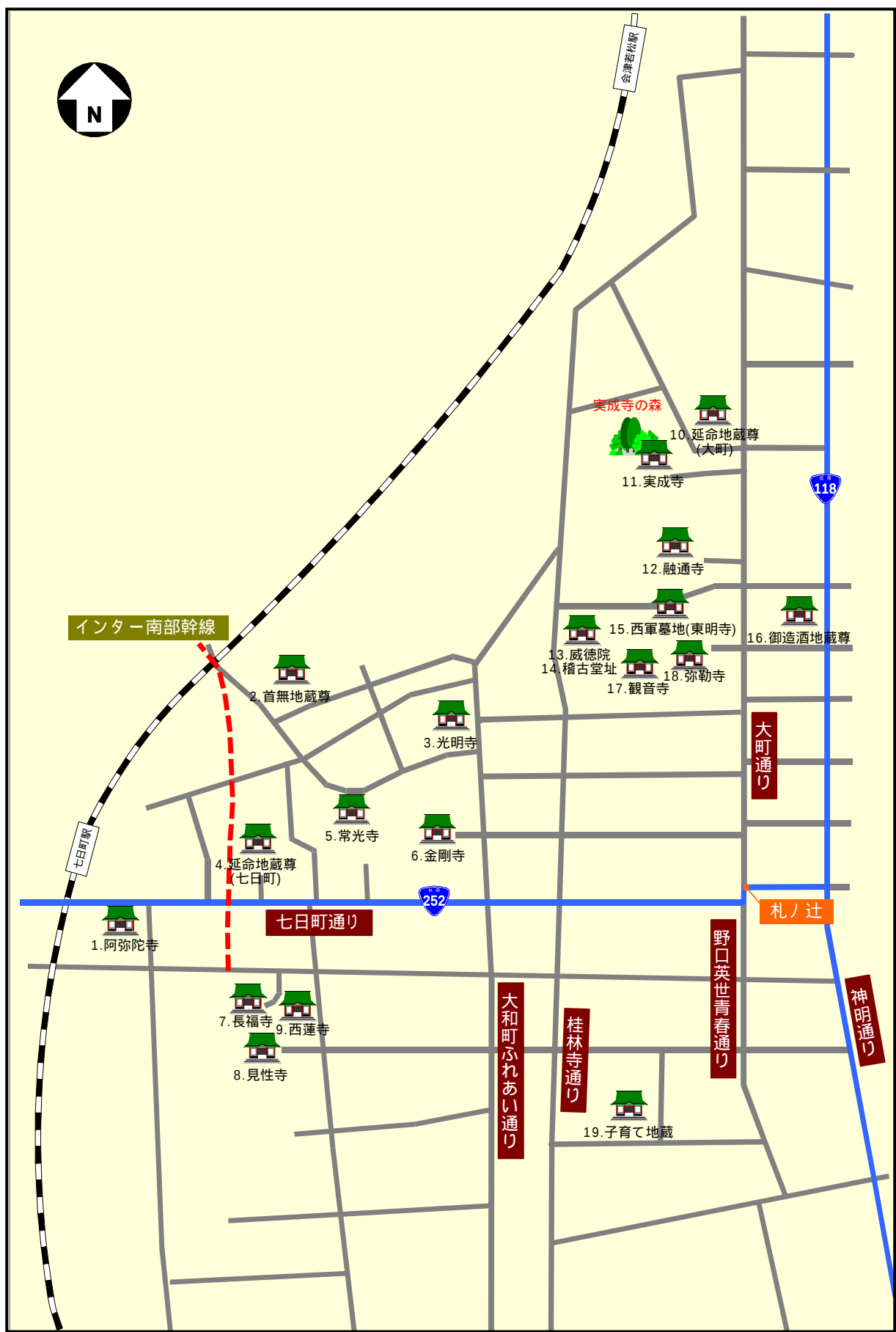


図 1 - 6 - 1 主な寺院の分布図

(2) 神社

20) 笠間稲荷神社

< 勝負事に御利益あり >

護神は茨城県の笠間から会津のこの地に移された。蚕養国神社の兼務で、水商売、勝負をする人の参詣が多く、遠来の信者も多いという。また、7月20日にお日市が開催されている。

▼ 笠間稲荷神社



21) 三宝胞衣荒神社

< 火難除け、安産に御利益あり >

葦名氏が治めていた正和時代に湯川の辺りにあった社を1592年(文禄元年)蒲生氏が現在地へ遷す。火難除け、安産の守護神であり、蚕養国神社が兼務している。

▼ 三宝胞衣荒神社



22) 熊野神社

< 広く崇拝される熊野三山の分社 >

全国に崇敬を集めている熊野三山の分社である。御神体はイザナギ、イザナミの尊で、田中稲荷神社が兼務している。神仏混淆信仰で熊野速王大神(イザナギ)は衆生の苦しみ病気を癒す薬師如来。熊野須美大神(イザナミ)は現世利益を授ける千手観音菩薩である。

▼ 熊野神社



家律美御子大神は来世浄土へ導く阿弥陀如来として過去、現在、未来を守護する縁結びの神といわれている。

祭礼は7月18日に行われ、昔は門柱両側に、子供御輿と樽御輿が練り歩き、出店などが多く出ていた。五三の桐の幔幕を張り、参拝は町内の人が多く、家内安全、身体堅固などを祈願する。現在は町内の氏子が管理している。

【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ)】

熊野神社の祭礼時には、仕掛花火のナイアガラが設置され、その壮大さが毎年楽しみでした。



23) 田中稲荷神社

< ほおずき市が開催される神社 >

1042年(長久3年)に創立とも言い伝えられている。
1384年(至徳元年)会津黒川の内に遷す。その後慶長の頃、蒲生忠郷の時に現在地に遷したといわれている。

葦名直盛の頃、社の前で稲座といわれる市が立ち、稲が売買されていたことから稲座明神ともいわれていた。

また、かつてこの辺りは田に囲まれていたため田中稲座といわれ、やがて田中稲荷神社と呼ばれるようになった。

田中稲荷神社は土蔵造りの神社として知られているが、度々の焼失により、1899年(明治32年)に火事に強い土蔵造りに建て替えられた。現在、土蔵造りの社は全国でもこの社と京都にある社の2つだけである。

田中稲荷神社は十日市とも縁の深い神社であり、1593年(文禄2年)市神を祀ったのが初めとされている。南と北の2箇所在市神様の仮宮を作ったといわれ、現在も同様の仮宮を建てていた。また、この祭礼には屋上より俵を投げそれを引きあって南が勝てば米価が騰がり、北が勝つと米価が下がると伝えられていた。

現在は、1986年(昭和61年)に野岩線が開通し、浅草と結ばれたことをきっかけに、浅草を参考にした「ほおずき市」が開催されている。

▼田中稲荷神社



24) 神明神社

< 葦名氏が深く信仰した神社 >

1369年(応安2年)飯篠盛枝が神体を奉じてきて、葦名氏が深く信仰したといわれている。1866年(慶応2年)その後、湯川のたもと南町に遷座したが、戊辰の兵火で焼失した。1871年(明治2年)に伊勢宮の仮殿を現在地に作り遷し、1873年(明治4年)神明神社と改称した。

終戦後、1945年(昭和20年)神明通りの開設によって造殿が現在地に遷された。

現在の社殿は1915年(大正4年)に改築が行われ、神楽殿は1970年(昭和45年)に場所を遷して改築されてものである。

現在、8月4日のお日市には神楽殿で神楽が奉納されるが、昔は、宮司を先頭に神輿を牛にひかせて町内を練り歩き、山車が多く出され、先人感謝祭もあり華やかであった。しかし、1957年(昭和32年)戊辰90年祭を契機に白虎行列を中心とした会津まつりに町内単位の祭りが統一されてしまった。

▼神明神社



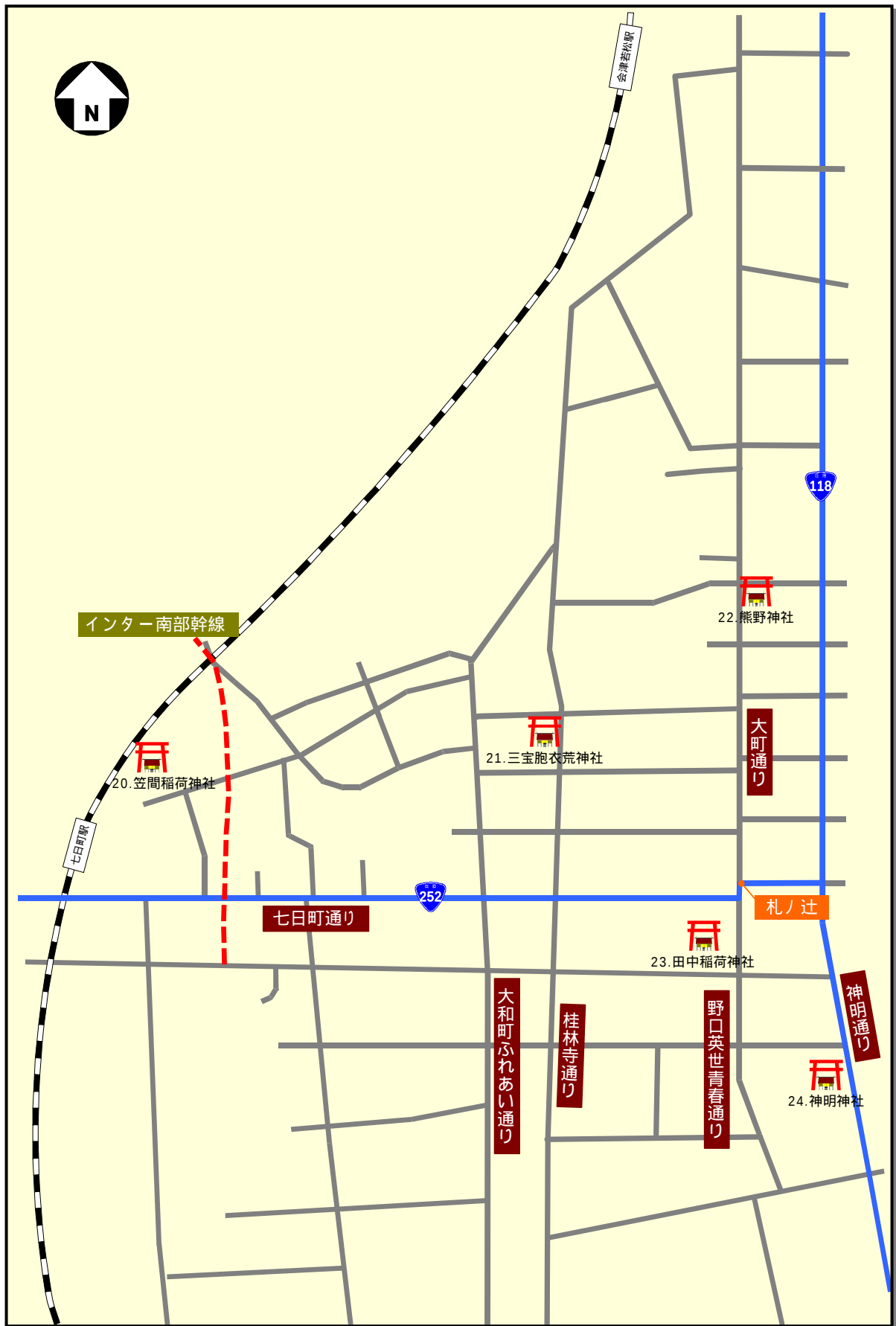


図 1 - 6 - 2 主な神社の分布

1-7 歴史ある建物

25) 羽金家住宅（歴史的景観指定建造物）

< 明治期の土蔵も立ち並ぶ >

1920 年(大正 8 年)に建てられた建物である。

黒々とした瓦葺の入母屋屋根、下見板張りと漆喰壁の建物は、堂々とした住居部と重厚な構えの玄関を持つ蔵座敷が良好に維持管理されている。明治期の土蔵も立ち並ぶ敷地には塀と門も再現され、往時の様子が窺える。

▼ 羽金家住宅



26) 菊地金粉製作所（歴史的景観指定建造物）

< 会津の伝統的景観を偲ばせる家屋 >

1936 年(昭和 11 年)に建てられた建物である。

瓦屋根に、珍しい幅広の横目地の入った黒漆喰の土蔵造り。この建物は、門構え及び塀と相まって、会津の伝統的な市街地景観を偲ばせる。維持管理に十分な手が加えられ、施主の想いが今に引き継がれている。

▼ 菊地金粉製作所



27) 滝谷建設工業(株)会津若松店社屋-----旧第四銀行若松支店

（歴史的景観指定建造物）

< 昭和当初の七日町を象徴する洋風建物 >

1927 年(昭和 2 年)に建てられた建物である。正面に配された 6 本の円柱が建物の重厚さを醸し出している。隣接の白木屋漆器店とも相まって、この洋風建築の並びは七日町通りの往時の町並みを現在に伝えている。

▼ 滝谷建設工業(株)会津若松店社屋



28) 旧郡山商業銀行若松支店（歴史的景観指定建造物）

< 大正時代を漂わせる建物 >

1922 年(大正 11 年)に建てられた建物である。

札ノ辻のランドマークとして親しまれてきた洋風建築。建築当時の先端様式であったアールデコが取り入れられ、当時の地域の先進性を示している。タイル貼りの外壁や上げ下げ窓が、今日の大正浪漫調のまちづくりに貢献している。

▼ 旧郡山商業銀行若松支店



29) 旧黒河内胃腸病医院（歴史的景観指定建造物）

< 昭和初期のモダンさを伝える建物 >

1936 年(昭和 11 年)に建てられた建物である。建築当時は大変モダンな建物だったことが、珍しい形状の屋根や天窓、壁面のレリーフなどから窺える。那智黒石で造られた塀とともに存在感を醸し出す姿は、野口英世青春通りにあって貴重な建物である。

▼ 旧黒河内胃腸病医院



30) 若松栄町教会（歴史的景観指定建造物）

< 野口英世が洗礼を受けた教会 >

1894 年(明治 27 年)に創立され、現礼拝堂は 1911 年(明治 44 年)に建設、2001 年(平成 13 年)に修復された。会津の中でもごく初期の西洋建築で日本でも著名な建築家ヴォーリスの関与も伝えられている。

野口英世が 18 歳の 4 月 7 日、藤生金六牧師により洗礼を受け、信徒人名簿に創立 2 年目、2 人目の信者として記載されている。

▼ 若松栄町教会



資料、出典；若松栄町教会パンフレット

【住民の思い、思い出（大須賀さん）】

この教会は、明治時代に誕生した、約100年の歴史を持つ教会です。設立当初から現在まで、青少年の教育に力を入れている教会と聞いています。

建物は木造建築で、過去には取り壊しという話もでていましたが、信徒や地域住民達の残したいという強い希望により、建設当時の姿で改修され現在に至っています。





赤字は歴史的景観指定建造物

図 1 - 7 - 1 歴史ある建物の分布図

2 . 商人文化

2 - 1 商人の歴史

■ 築田家屋敷跡

1592 年(文禄元年)、築田家は蒲生氏郷公が城下町を建設した折に大きく貢献したことが認められ、会津商人司・検断筆頭を賜った。第 79 代左京亮盛胤は葦名家直盛公に随伴し、会津黒川に來た 1384 年(至徳元年)に上洛し、足利義満將軍より商人司の御朱印を賜り、商法の諸式を定めた。

検断(大庄屋)として苗字、帯刀を許され、札ノ辻に屋敷を構え倉田家と共に商人をまとめ、藩と町との仲介、町の自治などの役割を務めていた。現在に続く十日市の創設もその一つである。現在、築田家は 102 代まで続いて、倉田家も子孫が健在している。

▼ 築田家屋敷跡



2-2 会津漆器

葦名時代には既に漆木栽培が奨励されており、若干の木地師も住んでいた。ただし、重点は漆蟻の採集であった。

蒲生氏郷が1590年（天正18年）の会津入部に際して、故郷の近江国（滋賀県）から、木地師、塗師の職人衆を招き漆器産業の基礎を造ったといわれている。

その後、加藤時代には漆器の製造が盛んになり、江戸への移出が始まったといわれる。海東五兵衛なる人物が大和町に漆器作業場を作り、多数の職人が集中して製造し、江戸に輸送したという伝説があり、七日町常光寺に墓もある。

1700年後半、松平容頌の家老田中玄宰により、会津漆器は大きく変わった。京都より塗師、蒔絵師、塗錆師を招き、品質の向上を図り、長崎から外国への輸出の道も開かれた。また、金箔、金粉の製造が始まったのもこの頃からである。

漆器業における株仲間は1745年（延享2年）の「江戸塗仲間帳」が最も古いものであるが、その中身は築田氏統括下の地元での市場商人の仲間掟を、そのまま踏襲したものでまだ独自性はなかった。その後、1771年（昭和8年）の「判形帳」には実的な掟も細かく定められるようになり、1700年中頃に株仲間が名実ともに整ったと考えられている。

1870年（明治3年）に株仲間は解散し、直ぐに塗店組合が結成された。1884年（明治17年）には若松漆器商業組合、1894年（明治27年）には若松漆器業組合が設立された。1901年（明治34年）には若松漆器業組合と改組され、現在の組合の原型ができたといわれている。

岩越鉄道（現在の磐越西線）の整備により、関東地域中心であった会津漆器の商圈が一気に全国に拡大し、生産額も増大した。輸送の利便だけでなく、運賃がかなり廉価になったことも幸いしている。

熾烈な市場競争に勝つため技術改良、デザイン向上が急務と考えられ、1925年（大正末期）から、組合により漆器木工試験場の設立に向け努力が続けられ、1928年（昭和3年）に市の補助と、組合の負担で漆器木工指導所が設立、以後、改組改称を経て、現在の「福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター」へと繋がっている。1920年後半頃（明治初期）から会津漆器は大都市移出型産業として発展した。

1958年（昭和33年）日中貿易が途絶し漆不足が深刻な問題となり、代用漆としての科学塗料の使用が本格化し、プラスチック漆器が会津漆器生産高の約8割を占めるようになった。

しかし、高度成長期が終わる頃から、プラスチック漆器の好況にも陰りが見え始め、現在は生産額・量ともに低迷しているが、技術革新として福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センターが中心となって新たな技術開発を行っている。



図 2-2-1 会津塗り



図 2-2-2 株仲間帳・江戸塗仲間帳

□主な漆器店

31) (有) 小野寺漆器店 (歴史的景観指定建造物)

▼ (有) 小野寺漆器店

< 漆器一筋、蔵づくりの漆器店 >

漆器一筋 100 年。業務用から贈答、土産品まであらゆるジャンルに対応する商品を取り扱う。建物は 1868 年(明治元年)に建設された歴史的建造物の蔵造りである。



【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ)】

建築時は味噌醤油を造っていたといわれ、運搬時に使用したといわれるトロッコの跡が、今でも奥の蔵から門まで地下にあると聞いています。

地主だった頃の米蔵もあります。



【住民の思い、思い出 (アネッサクラブ小野寺さん)】

こちらの店舗では、アネッサクラブによる『のきさきギャラリー』を行っていますので、ぜひこれらもご覧になり、歴史ある商人文化を感じて下さい。

その他、大町通りを中心とした周辺の店舗においても行われています。店の一角をギャラリーに見立て、昔から伝わる家のお宝(調度品や民芸品など)を季節にあわせたテーマをもって飾る活動です。



32) (名) 大島半兵衛商店 (歴史的景観指定建造物)

▼ (名) 大島半兵衛商店

< 明治に建てられた土蔵建築の漆器店 >

古典的な会津漆器から現代感覚あふれるものまで取り揃え、オーダーメイドの漆器も扱っている。大島半兵衛商店は 1877 年(明治 10 年)に建設された土蔵建築の漆器店である。

2 階部分には模様化された屋号があり、歴史を感じさせる佇まいである。



33) (有) 満山貞吉商店

▼ (有) 満山貞吉商店

< 江戸から続く長い歴史を誇る漆器店 >

1781 ~ 1788 年(天明年間)頃の創業といわれ、約 220 年の歴史がある。そのなかでも店主 3 代目の頃、幕府からの特別注文で、長持風の「御用櫃(ひつ)」を納めたことは有名である。



【住民の思い、思い出 (長谷川さん)】

この界隈では古い歴史を持つお店のひとつです。昔は店頭の間際に畳敷きがあり、歴代のご当主がお店に出られ、座売りなどで漆器を出して商売をされていました。

お店の裏側には代々伝わるお蔵があり、ひな祭りには伝統あるおひな様が軒先を飾っています。



34) (株) 白木屋漆器店 (歴史的景観指定建造物)

< 洋風土蔵造り 3 階建ての漆器店 >

1650 年頃 (慶安年間) に創業し、300 余年の伝統を誇る老舗である。1830 年頃 (享保年間) から現在の場所で漆器の製造販売業を継続しており、代々当主は喜左衛門を襲名し、現在は 14 代目に当たる。

また、店舗は 1997 年 (平成 9 年) 歴史的景観指定建造物にも指定されており、現在の建物は 1914 年 (大正 3 年) に建てられたものである。土蔵造りに近い技法を持った洋風建築で、大正時代の洋風建築として完成度が高く、外観が建築当時の形状で維持管理されている。

資料、出典 ; (株) 白木屋漆器店 HP

▼ (株) 白木屋漆器店



35) (株) 福西惣兵衛商店

< 店舗の奥に蔵座敷が控える漆器店 >

1919 年 (大正 8 年) に現在地にて創業、約 100 年の伝統を誇る老舗である。

1949 年 (昭和 24 年) 株式会社福西惣兵衛商店に改組し、現在に至るが、初代惣兵衛以来、会津塗り製造卸問屋を営んでいる。

資料、出典 ; (株) 福西惣兵衛商店 HP

▼ (株) 福西惣兵衛商店



36) (株) 鈴木屋利兵衛商店 (歴史的景観指定建造物)

< 黒漆喰の歴史的雰囲気漂う漆器店 >

戊辰戦争の際、薩長軍の屯所となった土蔵商店建築である。また、店舗は 1998 年 (平成 10 年) に歴史的景観指定建造物に指定されており、なまこ漆喰、黒漆喰、レンガ造りの防火壁などが歴史的な雰囲気を醸し出している。

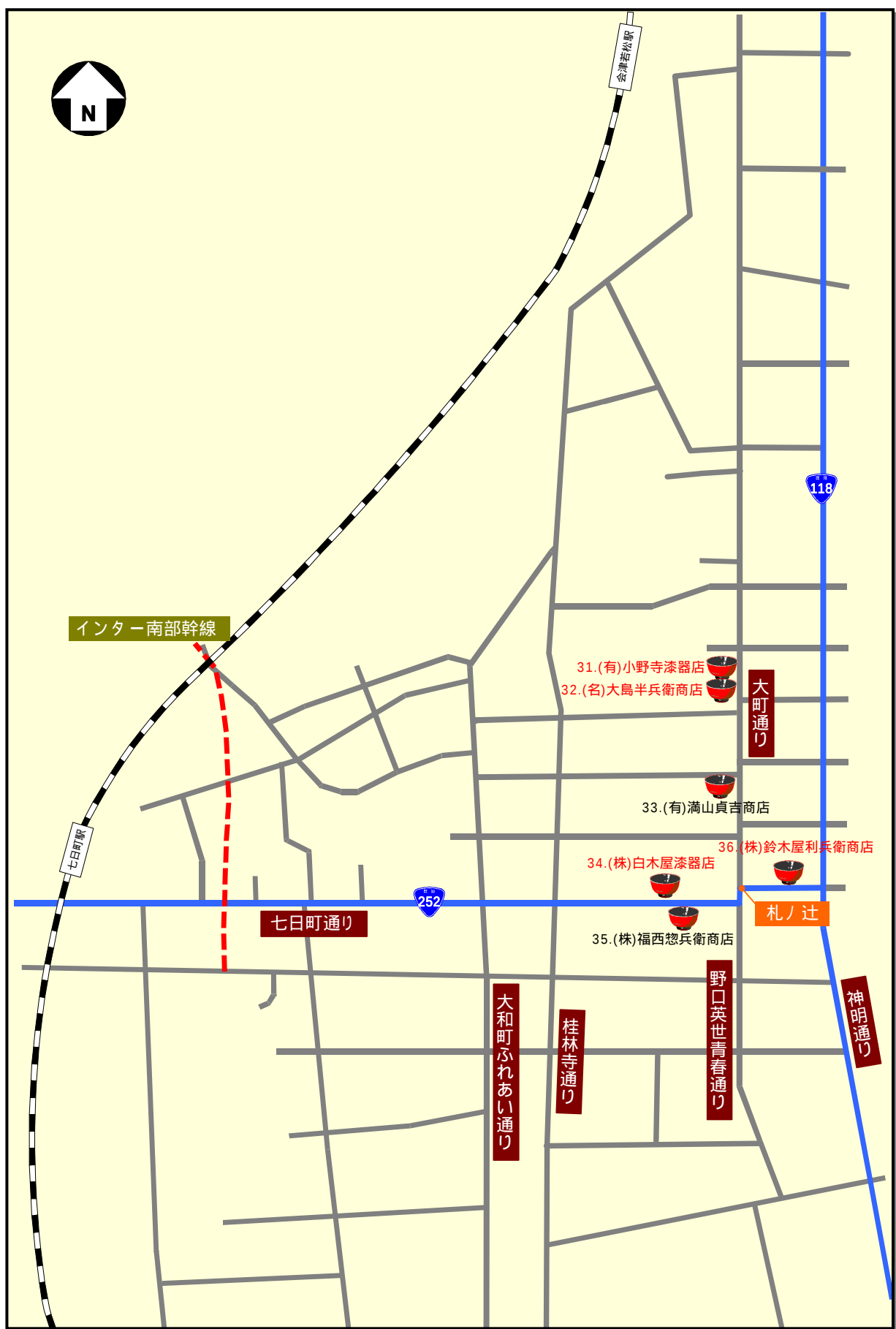
▼ (株) 鈴木屋利兵衛商店



【住民の思い、思い出 (鈴木さん)】

明治初期に 2 階が陳列場として西洋風に改装されました。会津では最も早かったと言われています。その洋風な雰囲気の中で、ワインカップやキャンディーボックス等をデザインし、それを漆器で製作して海外での世界博覧会に出品し、金賞をはじめ数度の受賞を果たしています。





赤字は歴史的景観指定建造物

図 2 - 2 - 3 主な漆器店の分布図

2-3 酒造

酒造りは、古くは神社や寺院などで行われていたが、奈良、平安時代頃になると酒の販売を行う者が出てきた。その後室町時代には酒造業を営む者が出てきて、質屋などを兼務するようになった。領主はこれを保護するとともに、酒屋役という税金を課し、財政の一翼を担わせた。

江戸時代に入ると、急速に酒造業が発展し、飯米にも支障をきたしたため、幕府ではその統制に乗り出した。酒屋や酒造米の実態を把握するため、酒屋の数、酒造高などの調査を行なった。それによると、預かり地で260石と、藩全体の石高23万石の約1割にも及ぶものであった。

そのため、酒造家になるには藩から許可を受けなければならなかった。「酒箒」といわれる酒造業の鑑札を受け、酒造高も定められていた。その一方で、酒造家の保護も図り、酒屋のある川の沿岸住民には、水を汚さないよう取り計らった。

1697年(元禄10年)になると、酒造の営業税というべき酒運上銭の取り立てが始められた。それまでは酒造量によって、税金を納めていたが、さらに追加されることとなった。

酒造については裾野が広く、藩の専売とはならず、藩の統制の中で民間での生産が維持されて、酒造家は、第1に農民における中・上層農民、第2に城下における地主、質屋、卸問屋などの商工者、第3に郷村における半商半農を営む人々、宿場での旅籠や農業を兼務していた人々などであった。

1700年代半ばになると、田中玄宰による酒造の構造改革が始まり、品質向上を図るため、摂津国から杜氏を招き、城下材木町で町や郷村の酒造家にその技術を伝授させた。ついで、材木町住吉川原の泉川が醸造に適することを確認し、1792年(寛政4年)、ここに藩営の酒蔵を築き「清美川」の銘酒を売り出し、下野国まで販売されるようになった。

しかし数年後、官営では様々な規定束縛があり、販売も思わしくなくなってきたため、藩は清美川の製造販売から手を引き、玄宰は酒造事業の民間移管を行い、以後、酒造りは明治維新まで続いていた。



図 2-3-1 酒蔵で働く人々



図 2-3-2 明治期の酒蔵

□主な酒造店

37) 鶴乃江酒造株式会社

<江戸時代から続く、伝統を守り続ける酒造>

1794年(寛政6年)に創業し、200年以上の伝統を誇る老舗の酒蔵である。

代々平八郎を襲名し、屋号を永宝屋と称している。銘柄「七曜正宗」「宝船」を醸造、明治初期に会津の象徴である鶴ヶ城と猪苗代湖を表す「鶴乃江」と改め、1977年(昭和52年)藩祖保科公の官位にちなみ「会津中将」を発表した。

最近では女性感覚を活かした新しい銘柄「ゆり」が誕生している。

資料、出典；鶴乃江酒造株式会社 HP

▼鶴乃江酒造株式会社



38) 末廣酒造嘉永蔵(歴史的景観指定建造物)

<会津の酒を全国に知らしめた酒造>

会津・保科正之公の家臣として家を興し、御用酒蔵として名を馳せていた新城家から新城包格(初代猪之吉)が分家独立して、1850年(嘉永3年)に酒造りを始めたといわれている。

初代・2代が土台を築き、3代目は率先して県外に酒造りのプロ・杜氏を求めた。杜氏の導入によって、酒の品質の向上と安定を図ろうと、山形県大山から大山杜氏を招き、福島県で初めて杜氏による酒造りを実現した。

当時はまだまだ交通の便が悪く、会津の酒は外に出ない時代だったが、3代目は会津の外への販売に力を注ぎ、本宮・郡山・東京へと進出した。1910年(明治40年代)には生産量で会津一・二の酒造業となった。

4代目は、酒質の改良に全力を注ぎ、酒に適した原料米を求めて自ら選種。米国から精米機を入れて自家精米もした。さらに、優れた原料水を求め十数ヶ所の井戸を掘り、適度硬度の水を探した。また、常に灘の名醸を研究し、丹波杜氏を招いて灘式醸法の採用にもふみ切った。

大正時代に入ってから家業がいよいよ盛んになり、1915年(大正4年)には清酒「末廣」が宮内省御用達になり、さらに昭和にかけての各種品評会で、数々の賞を受け、会津の酒の名声を全国に広めることになった。

5代目・6代目に入って、末廣は原点に帰り、酒づくりは米づくりからと、農協と有機肥料を共同開発した。会津の米と会津の水、会津杜氏と会津にこだわり、酒造りの伝統の技法を頑なに守りながら、科学的理論と合理的設備を導入している。

資料、出典；末廣酒造嘉永蔵 HP、会津若松市 HP

▼末廣酒造嘉永蔵





赤字は歴史的景観指定建造物

図 2 - 3 - 3 主な酒造店の分布図

2-4 会津菓子

□主な菓子店

39) 熊野屋菓子店

<会津の素材にこだわる菓子店>

創業 1887 年（明治 20 年）であり、原料になる小豆や米の生産から菓子にいたるまで全てが自家製で作られている。

特に「熊団子」等の人気が高い。

▼ 熊野屋菓子店



40) (資)庄助製菓本舗

<全国菓子大博覧会で金賞を受賞した菓子店>

創業 1907 年（明治 40 年）。「庄助餅」「白虎の梅」は創業以来の伝統菓子であり、1984 年（昭和 59 年）の第 2 回全国菓子大博覧会、名誉金賞を受賞している。

「庄助饅頭」「庄助最中」等も人気が高い。

▼ (資)庄助製菓本舗



41) (有) 白虎最中本店

<朝炊き『あん』にこだわり続ける菓子店>

創業 1940 年（昭和 15 年）であり、北海道の小豆など厳選した材料を使い、全てが手作り。

ブライダル部門では、式の前日にお作りしたオリジナル生ウエディングケーキが好評である。

特に「会津城下町」「会津ゆべし」等の人気が高い。

▼ (有)白虎最中本店



42) 五郎兵衛飴本舗

< 弁慶や白虎隊も口にした飴店 >

800年の歴史を持ち、弁慶や白虎隊も口にしたと伝えられる味（義経、弁慶の借用書が伝えられている）。正月、縁日、お日市など露店で馴染みの懐かしい庶民のお菓子。会津産の餅米と麦芽だけで作る滋養に富んだ飴は、現在も昔と変わらない製法で丁寧に作られている。

▼ 五郎兵衛飴本舗



■ 義経、弁慶の借用書

此の度冷腹になった為、練り飴を食し、代金壹貫文を借り受けました。もし返さない時は、百倍をもって時の將軍様の御裁断あおぎます。

借主・五位尉 源義経 請人・武蔵坊弁慶 花押

執事・亀井六郎 花押

文治四丑年四月六日 会津黒川 五郎兵衛殿

この証文は「五郎兵衛飴本舗」に伝わるもので、治承年間、蒲生、松平時代の製飴御用商人を務めた。飴は古くより優れた滋養・携行食料として知られ、多くの藩士、白虎隊士も食したと文献にある。

43) (有) 伊勢屋製菓

< 白虎隊も食べた椿餅の菓子店 >

“白虎隊も食べた椿餅”の伊勢屋。蒲生氏郷公の会津若松拝領の折、伊勢松坂より伝えられた技術を基に創業、以来200余年地元の和くるみを使い、手作りで伝統の味を守っている。現在の店主で9代目の老舗の菓子店である。

▼ (有) 伊勢屋製菓



【住民の思い、思い出（長谷川さん）】

開業当初は、鶴ヶ城の南町大橋通り付近に店舗があり、蒲生家の職人として土着し、お菓子屋を始めるようになりました。現在の場所には戊辰戦争後に移転してきています。



昔から伝わるお菓子としては、落雁などの型菓子などがありましたが、今では椿餅などが昔のまま作られています。当時新選組が食したお菓子として代々伝えられており、菓子名もお城の椿坂から取ったと伝えられています。

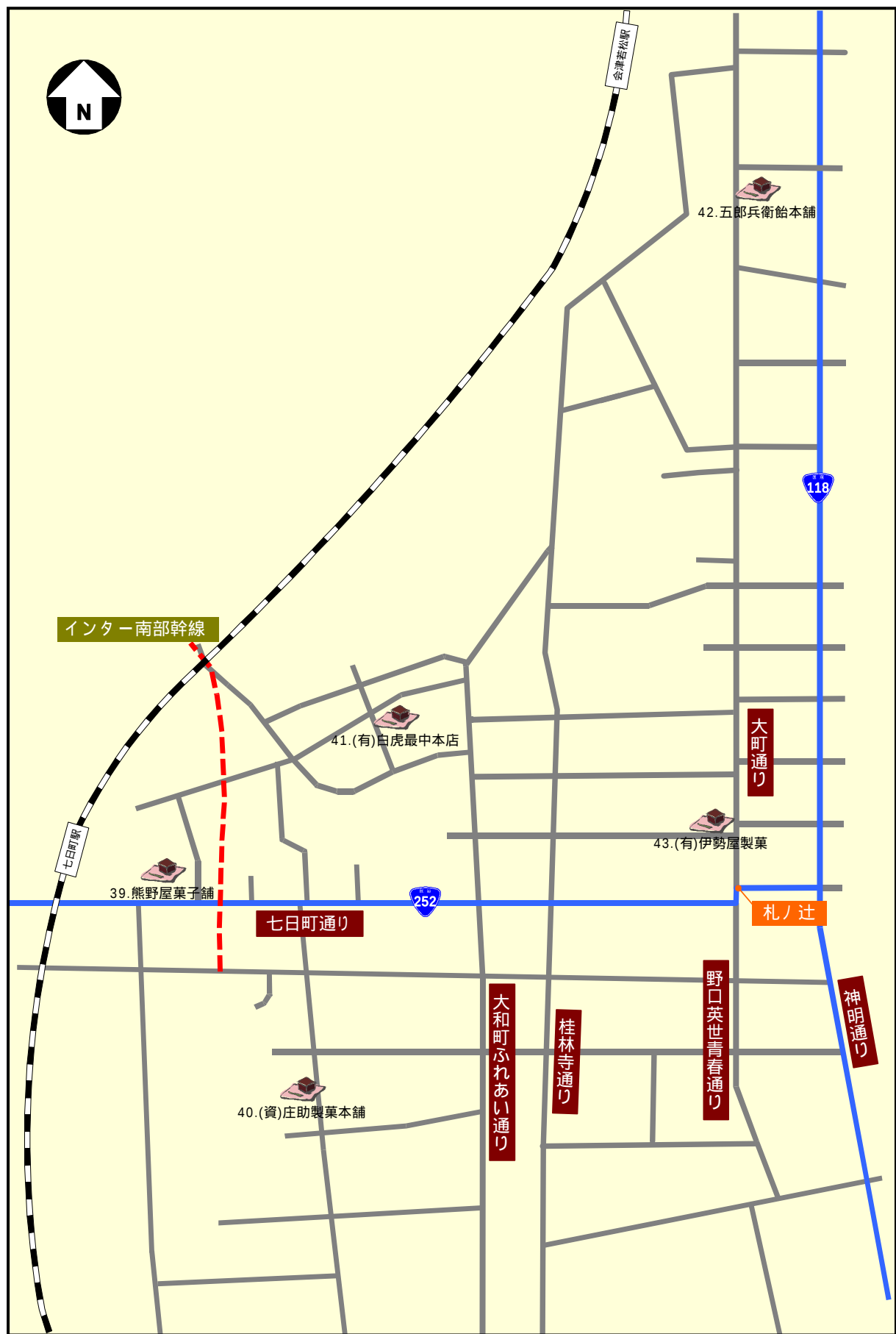


図 2 - 4 - 1 主なお菓子店の分布図

2-5 民芸品等

(1) 絵ろうそく

500年前、会津藩主芦名盛信公は漆の樹を領内農民に繁殖栽培を大いに奨励して以来、会津は漆器の製造と共に漆樹の実より最上質の蠟を採取してろうそくの生産を始め、会津ろうそくは品質堅く長時間灯るので、好評を得ていた。その時、既に絵ろうそくは作られていたといわれている。その後、蒲生氏、加藤氏も積極的に生産を奨励し、更に江戸時代になりろうそくは盛んになった。会津は特産品にはあまり恵まれなかったため、藩外に売り出すことができたのは漆製品と蠟がその最たるものであり、蠟と漆は会津藩の専売とされた。

普通のろうそくは神社に供え、絵ろうそくは仏壇に供える。絵ろうそくは高級品だったため、侍等の一部の人にしか使えなかったが、明治以降は一般の人でも購入できるようになった。

かつては、ろうそく屋から完成したろうそくが絵つけ師のもとに送られて絵付けされていたが、現在ではろうそくの製作から絵付けまで絵ろうそく屋で行っている。

昔の絵ろうそくは蠟の原料が漆であったが、現在はハゼの実を使用している。また、絵の具が豊富になったことで色彩が一層華やかになった。

現在では、会津若松市内において絵ろうそくの製作を行っているのは3店舗（ほしばんローソク店、小澤ろうそく店、山形屋本店）であり、会津若松の伝統工芸を大切に今に守り伝えている。



図 2-5-1 絵ろうそくの作業

(2) 会津もめん

会津で綿花栽培が始まったのは1627年(寛永4年)、会津藩主加藤嘉明が入部したときに、伊予松山(愛媛県)から織師を招いて会津に伝習したのが、会津もめんの起こりであるといわれている。その後、会津藩主保科正之が綿花の栽培を奨励してから、会津に定着し発展してきた。

明治初めまでは、会津の各地の農家で自家用として綿花栽培は行われ、会津は綿花栽培の北限地ともいわれていた。明治10年代には、外国から綿花の輸入が急増し、その影響を受け、大正時代になると綿花栽培は姿を消してしまった。

しかし、1937年(昭和12年)に始まった日中戦争が長期化するにつれて衣料品が不足するようになり、再度、綿花栽培が行われるようになったが、特需景気以後になると全く綿花栽培は姿を消してしまった。

会津もめんは無地織りや経縞、格子縞が多いのが特徴であり、丈夫で農作業の仕事着用として用いられていた。今日では素材としての純綿を守り、縞柄に改良を加え民芸織物とし、着尺地、洋服地など様々な用地に用いられている。

最盛期の大正末期には30数社あった機業場も、現在は2社(山田木綿織元、原山織物工場)のみである。



図 2-5-2 会津もめんの作業

(3) 起きあがり小法師

古くから会津若松地方に伝わる「起姫」とも呼ばれている。起きあがり小法師は和紙の張り子細工で作られ、起きあがり小法師を赤く塗るのは魔よけを意味し、起きあがり小法師の着る衣装の中で緋の衣は最高位を表している。しかし、最近は観光客の多様なニーズに応えるため青い起きあがり小法師も作られている。

毎年、正月初市で売り出され、家族の数より1個多く買う習わしになっており、家族繁栄と家内安全を祈願するもので、会津風車、初音と同様、三大縁起物の一つである。



図 2 - 5 - 3 起きあがり小法師の作業

(4) 会津風車

風車の中心を豆で留めてあるが、まめで元気に一年中過ごせるようにとの意味がある。起きあがり小法師、初音と同様、三大縁起物の一つである。

▼ 会津風車



(5) 初音

鶯の声を表す笛で、春一番に鳴く鳥で縁起がよいといわれ、毎年元旦の朝になると「はつね、はつねー」とこの笛を吹きながら売り歩いていた。会津では初音は竹製のうぐいす笛で吹くので、福を呼ぶ縁起物として、元旦に各家庭で買われたものである。起きあがり小法師、会津風車と同様、三大縁起物の一つである。

▼ 初音



（６）会津唐人凧

諸説があるが、キリシタン大名、蒲生氏郷が持ち込んだ説と、大陸から長崎を経由して当地に伝わった説があるが、後者が有力である。図柄は約 20 種あるが、目をむき大きな口から長い舌を出し唐人武者の兜に鬼が噛み付いている「べろくんだし」が代表的。戊辰戦争後、城兵の志気を高めるために揚げたのは有名な話である。

▼ 会津唐人凧



（７）赤べこ

赤べこは会津を代表する張子の玩具。厄除け、商売繁盛の縁起物。約 1,200 年前（大同 2 年）に会津虚空尊の建立の際、どこからか数頭の赤牛が現れケヤキの大木を運び、完成の夜に忽然と姿を消したという伝説と、会津地方で悪性の疫病が流行った際、赤べこを持った子供が病を逃れたことから、後にお守りとして普及したという説がある。

▼ 赤べこ



今も木型に和紙を幾重にも貼る昔ながらの技法で製造しており、全国的にも親しまれている会津を代表する玩具である。

（８）桐製品

会津は桐の産地である。昔から会津では「女の子が生まれたら桐の木を植えよ」という言い伝えがある。桐の成長は早く、生まれた女の子が嫁入りするときには、その桐は伐採可能となり、嫁入りたんすや嫁入り支度が出るからといわれている。

▼ 桐製品



会津桐は、材質が緻密で粘りと光沢があり、材色が白銀色で、年輪がはっきりしている。

このような特色を生かして、下駄、たんす、琴などが作られている。

これらの伝統的な桐製品は今も昔も変わらず、また、伝統的な桐製品に対して新しい製品が作られるようになり、茶たく、花瓶、菓子鉢、小だんす、ライター、灰皿セット等、桐材の軽さや木目の美しさを活かしたものに人気が出ている。

(9) 主な民芸品店及びその他の店舗

44) 渋川問屋 (歴史的景観指定建造物)

< 山国の会津に海の幸をもたらした問屋 >

1868 年 (明治初年) に創業し、山国の海産物問屋として海産物はもとより、山菜も扱った。

海の幸に恵まれていなかった会津では、ニシン、棒鱈等の塩干物は貴重なものであり、ここから強清水のニシンの天ぷら、門田一ノ堰の棒鱈や、奴郎ヶ前の田楽をはじめ、会津一円の魚屋、料理屋に供給していた。今ではニシン山椒漬け、棒鱈の煮物は会津の郷土料理に欠かせないものとなっている。

また、アユ、肥料、酒、醤油等も扱い現在でいう総合商社であった。会津城内における製氷も初めて手がけ、当時は民間の冷蔵庫としては最大のものといわれ、現在でも鶴ヶ城内で製氷が行われている。

▼ 渋川問屋



45) ほしばんローソク店

< 会津絵ろうそくの伝統を守り続ける >

元祖会津絵ろうそく掛元として、創業 1772 年 (安永元年) の老舗である。手作り手描き製法を江戸時代から親子代々受け継いでおり、現在も 1 本ずつ手作りで昔そのままの製法で作られている。

一般の方は、作業見学や絵付け体験もできる。

▼ ほしばんローソク店



46) 松村金物店

< 商店としては珍しい蔵づくりの店舗 >

1889 年 (明治 22 年) 松村金物店は商店としては珍しい蔵造りで創業した。現在もこの蔵で商店を営んでいるが、現存する蔵では比較的古い建築物である。

当時、材料は峯山 (猪苗代) より搬入したと伝えられている。

▼ 松村金物店



【住民の思い、思い出 (七日町 横山さん)】

松村金物店は永久に保存したい建造物です。



47) 山田民芸工房

< 会津三大縁起物を製造販売する民芸工房 >

起きあがり小法師はダルマのような形の小さな張り子人形。家族の人数より 1 個多く買い、家族が増えて一家が繁盛しますようにと願うのが慣わしとなっている。山田民芸工房の店内に入ると、大小様々の起きあがり小法師たちが迎えてくれる。絵付けの体験教室もできる。

▼ 山田民芸工房



48) 山田木綿織元

< 会津もめんを今に伝える織元 >

創業 1905 年（明治 38 年）であり、戦時中は機械類を没収されてしまい操業を中止せざるを得なかったが、戦後再開した。

現在も昭和初期の旧式の豊田式織機を使用しており、昔から伝わる技法に加え、新しい色、柄に挑戦するなど会津もめんの魅力を追求している。

また、染めから、織り上げまでの仕事を 1 箇所で行っており、織物ができるまでの工程を分かりやすく見学することもできる。

▼ 山田木綿織元



49) 清水屋履物店

< 伝統の会津桐下駄がある履物店 >

会津は桐生産の本場として全国的に有名である。その中でも、清水屋履物店は創業 1830 年頃（天保年間）であり、それ以来現在の地に住んで 150 年以上と歴史が長い。日本を代表する趣味の履物として好評である。

▼ 清水屋履物店



50) 永山陶器店（歴史的景観指定建造物）

< 白と黒漆喰が織り成す重厚な店構えの陶器店 >

1916 年（大正 5 年）に建築された土蔵で、白漆喰と黒漆喰に塗りわけられた重厚な土蔵商店建築の店蔵である。

▼ 永山陶器店



51) (株) 満田屋 (歴史的景観指定建造物)

< 創業以来味噌田楽を守り伝える郷土料理屋 >

1834 年 (天保 5 年) の創業以来 160 年余、会津の地で伝統を守りとおした老舗である。昔ながらの味噌蔵を改築した店舗には「味噌田楽」の香りが溢れている。

味噌田楽、薬味で味付けした味噌だれを野菜・餅・乾魚等につけて炭火で焼き上げた野趣満々の素朴な郷土料理が味わえ、地酒も飲むことができる。

▼ (株) 満田屋



資料、出典 ; (株) 満田屋 HP

52) 福西本店 (歴史的景観指定建造物)

< 会津特産品を座売りする黒壁の蔵店 >

昔から福西本店という通称で知られている老舗 (正式名称 ; 福西伊兵衛商店) である。

福西本店といえば黒壁の蔵というように地元では多くの人々が知っているが、黒漆喰の蔵は明治末期から大正初期にかけて建築されたものである。

現在でも会津特産品の座売りを行っている店蔵である。

▼ 福西本店



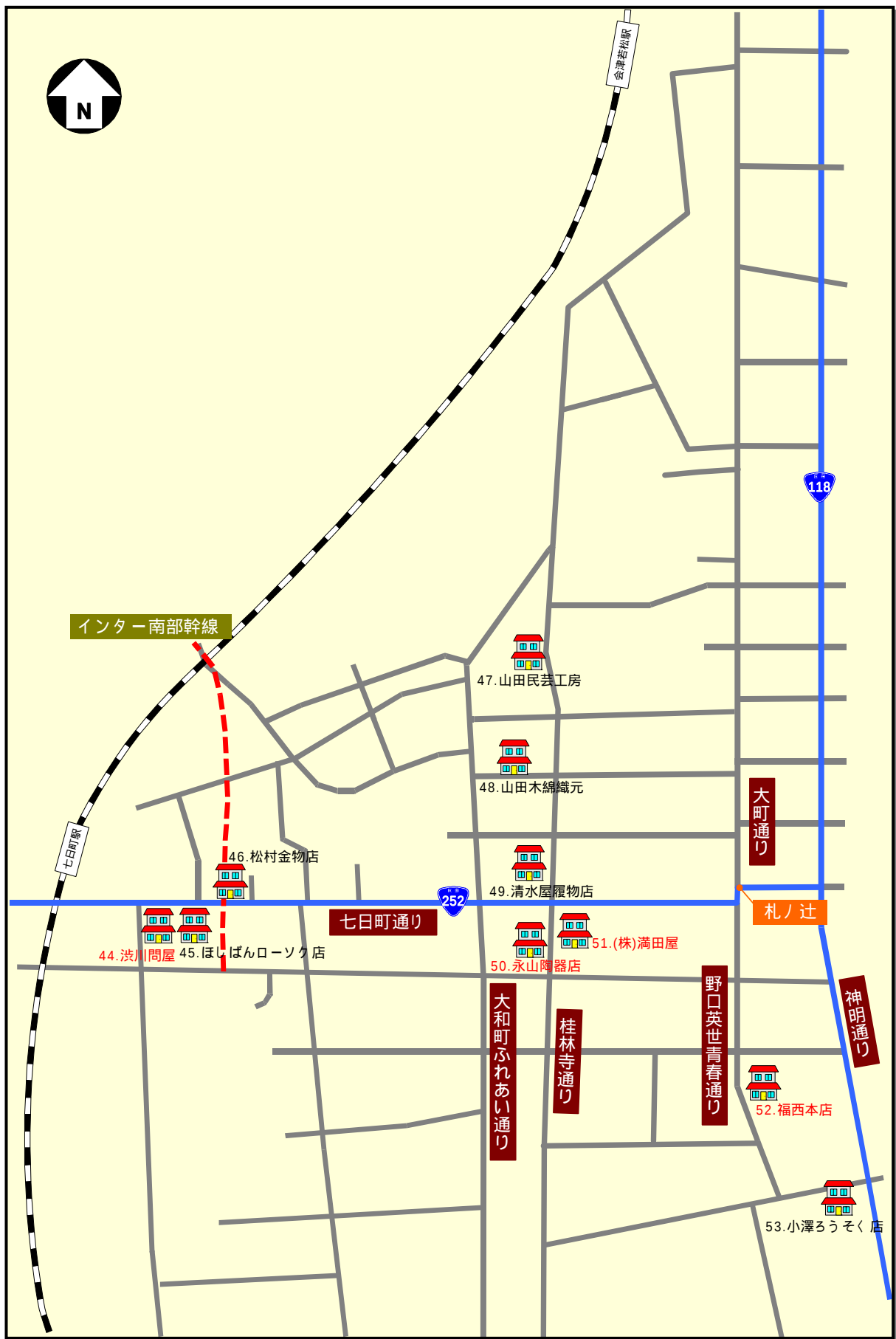
53) 小澤ろうそく店

< 会津絵ろうそくを広く伝える >

明治初期の店構えをそのままに、会津ろうそくの手作り・手描き模様の伝統を伝えている。一般の方は絵付け体験もできる。

▼ 小澤ろうそく店





赤字は歴史的景観指定建造物

図 2 - 5 - 4 主な民芸品店等の分布図

2-6 旅籠・料亭・遊郭

(1) 旅籠

越後街道、米沢街道等が集中する七日町には旅籠が多くあった。17世紀中頃には領主に認められた旅籠は14軒であったが、『旅籠株極帳』によると1845年(弘化2年)には30軒、1868年(明治元年)には33軒がこの界隈に集中したといわれている。

幕末の代表的な旅館としては清水屋旅館、みの屋、川又屋、ますや、真船旅館等があげられる。

■清水屋旅館(現在:大東銀行会津若松支店)

高田藩(新潟県)の定宿であった。幕末、▼清水屋旅館
吉田松陰が東北亡命の旅で、戊辰の役の際には新選組土方歳三が宿泊したといわれている。明治に入って防火建築の木造3階建洋風旅館に改築されて、世人の注目を集めて沢山の人が建物を見に集まってきた。

明治に入ってから三方道路問題で、帝政党の議員らが宿泊中の自由党員を襲撃する、いわゆる清水屋事件の舞台ともなったが、昭和初年に惜しまれながら取り壊された。



▼清水屋旅館跡



(2) 料亭

新潟との交流が船でなされ、馬車での交通が盛んであった時には、七日町は会津文化の先進の地として、商業の町として非常に栄えたといわれており、その当時より明治にいたるまで、池田屋、松風亭、万寿、天京等、料亭が並び商談、歓楽にと賑わっていた。

若松市に1908年(明治41年)に歩兵第65連隊が設置されるとともに、料亭も栄町へと移っていった。

(3) 遊郭

七日町下の北側には若松市一番の花街があったといわれている。磐見町がそれであり、町の真中には川が流れ柳の木が植えられ、多くの検番や遊郭があり大勢の芸妓が一夜の酔夢を楽しませてくれたそうで、磐見町の遊郭は三日町の後にできたが、七日町の盛栄と相まって会津若松市における一番の歓楽街であった。

会津若松市に連隊が設定され、歓楽街が栄町に移り、終戦後より急速にさびれ、現在では建物の一部と街道に一部の面影を残すのみである。

また、遊郭の衰退と共に料亭もさびれていったといわれている。

2-7 観光施設

54) 七日町駅カフェ

< 会津の名水を利用した珈琲を楽しめる駅カフェ >

洋館風の七日町駅舎に会津の特産品を並べたアンテナショップである。会津の名水を使った珈琲や地場産のジュースも飲める。

会津の観光やイベント、物産の情報がかり、企画展も随時開催されている。

▼七日町駅カフェ



55) アイバッセ

< 会津の面白さ懐かしさを一箇所に集めた館 >

2002年(平成14年)4月に大正浪漫の薫る七日町通りの路地“七日町ローマン小路”に、洋館風テナントビル“アイバッセ”がオープンした。

アイバッセ”は、会津弁の「あいばせ」「あいばっせ」からとったもので、「さあ(一緒に)行こう!」という意味である。

「なつかしくて面白い」ことをモットーとして店舗誘導を図っている。

▼アイバッセ



資料、出典 ; (株) まちづくり会津 HP

56) 会津ブランド館

< 会津地方の良いものを紹介する館 >

2004年(平成16年)にオープンし、「会津ブランド認定品」をはじめとする会津地域の良いもの、価値のあるものなどを集めて、会津若松市を訪れた人に紹介、販売している情報発信施設である。

▼会津ブランド館



57) 嘉永蔵・クラシックカメラ博物館(歴史的景観指定建造物)

< 歴史ある6つの酒蔵とクラシックカメラ博物館 >

■ 嘉永蔵

増築をしながら、現在の姿になった。現在は市の歴史的建造物に指定。新工場の「博士蔵」に仕込みを移した後も、少量の特定名称酒を醸している。ここには野口英世博士や石原裕次郎氏も立ち寄っている。

嘉永蔵では、係員が案内をして酒造りの工程に沿って説明をしてくれる。また、昔の酒造りの道具等も展示されている。

■ クラシックカメラ博物館

篠原氏(元テレビ局員)が約20年にわたって収集した700台のうち、580台が展示されているクラシックカメラ博物館。世界各国の名機、珍品ばかりで個人コレクションとして国内最大規模。

▼ 嘉永蔵・クラシックカメラ博物館



資料、出典 ; 末廣酒造嘉永蔵 HP

58) 心眼美望館

< 古代の神秘を伝える神器や仏像を展示する美術館 >

世界の古代人が何に神秘を見出してきたのかをテーマに数々の神器や仏像を展示している。

神々のルーツを 5,000 年前のメソポタミアに求め、その流転を解説しており、2 階には仏教世界の釈迦像を展示している。

▼ 心眼美望館



59) レオ氏郷南蛮館

< 会津若松の基礎を築いた蒲生氏郷の資料館 >

会津若松の町の基礎を作った蒲生氏郷の資料館である。2 階には氏郷が作った七層の天守閣の模型が展示されている。

▼ レオ氏郷南蛮館



60) 会津町方伝承館

< 会津の伝統を伝える館 >

会津地方に長年培われてきた伝統産業や伝統工芸とふれあうとともに、それらの振興をはかり理解を深めることができる施設として 1986 年(昭和 61 年)に開館した。

1 階では、会津漆器や会津もめん、絵ろうそく、赤べこなどの民芸品が展示・販売されており、2 階の企画展示コーナーでは、関係する団体などが伝統産業品などの展示や作品の発表を行っている。

▼ 会津町方伝承館



61) 會津壱番館野口英世青春館（歴史的景観指定建造物）

< 野口英世が手術を受けた医院、資料館 >

今なお残る「旧会陽医院」。野口英世は、ここでやけどを負った手の手術を受け、医学のすばらしさに感動し、書生となり医学の基礎を学ぶこととなった。

ここには「世界の野口英世博士」への第一歩がしるされており、彼の功績を後世に残すべく資料館とした。

また、この建物の前の通りは「野口英世青春通り

(Dr.Noguchi Street)」と命名され、野口英世が「洗礼を受けた教会」、「初恋の人、山内ヨネの家」等が現存している。

▼ 會津壱番館
野口英世青春館



資料、出典；會津壱番館 HP

62) 野口英世青春広場

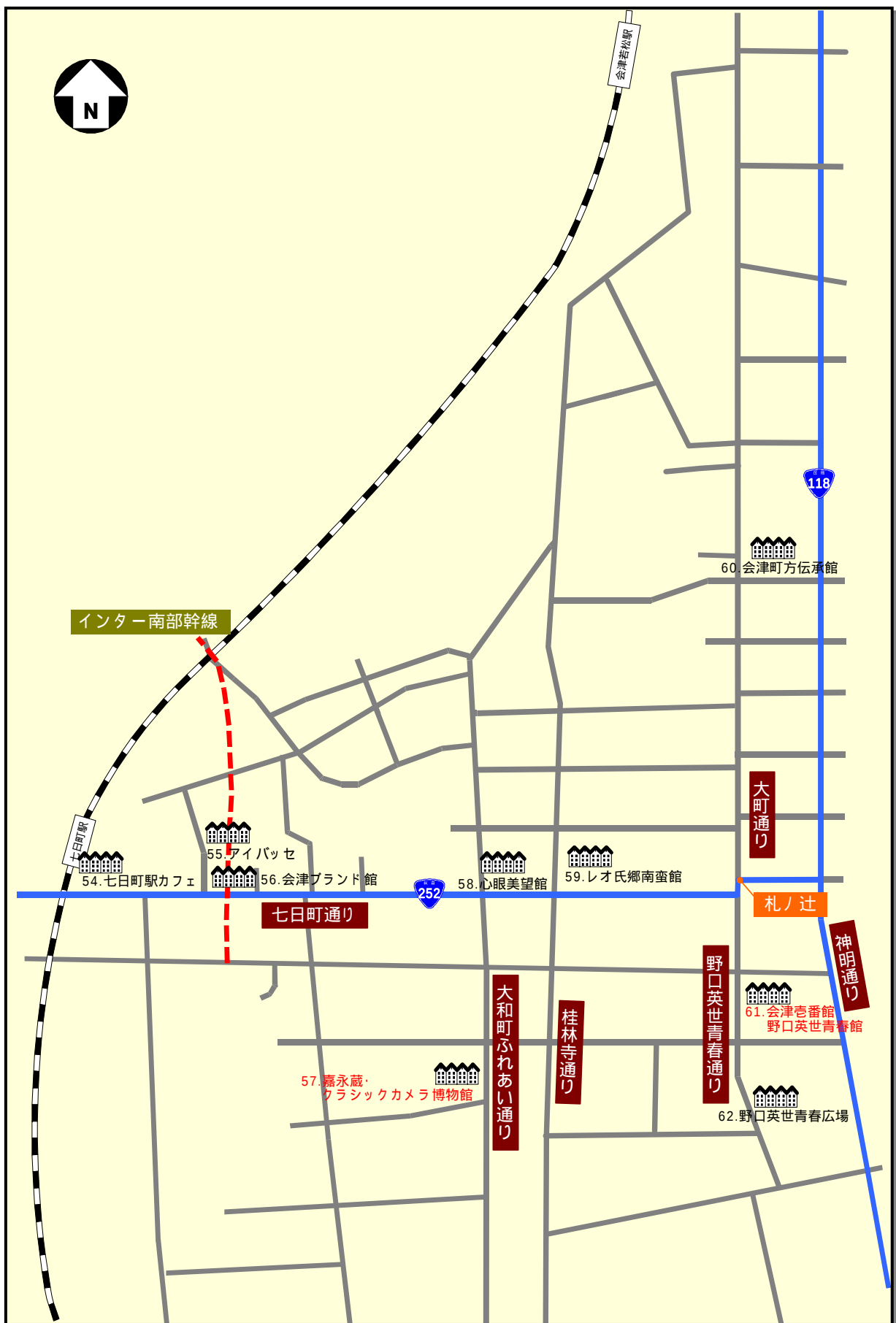
<野口英世の銅像があり、こだわりの店が立並ぶ広場>

2005年(平成17年)5月1日にオープンした。街中の賑わいの拠点としてオープンした多目的広場である。一年を通じて様々なイベント等が開催されている。

▼野口英世青春広場



資料、出典 ; (株) まちづくり会津 HP



赤字は歴史的景観指定建造物

図 2 - 7 - 1 主な観光施設分布図

3 . 生活文化

3-1 行事

1) 十日市

毎年 1 月 10 日に開催される会津地方最大の初市を「十日市」といい、約 10 万人に及ぶ人出がある。起源は 1384 年(至徳元年)までさかのぼり、輩名直盛が会津黒川城を築いたときから始められたといわれている。市内大町通りや神明通りに出店が並び、会津三大縁起物「起きあがり小法師・風車・初音」や漆器、日用品などの掘り出し物を買求める人たちで大いに賑わっている。

十日市の市神様は商売繁盛を祈願する「恵比寿像」で 2003 年(平成 15 年)の十日市に 40 年ぶりに復活した。この恵比寿像は、江戸時代まで馬場町の検断であった倉田家に保管されており、昭和 40 年頃、交通事情により市が縮小されるまでの毎年初市の際、十日市の氏神として奉られていた。



図 3-1-1 十日市の賑わい

2) 歳の神

1 月 14 日は会津では女の年取りといい、歳の神(どんど焼き)で正月飾りやお札をお焚き上げして正月行事が終わる。農家では 15 日に行うところが多い。

札ノ辻界限でも 14 日～16 日間の夕暮れ時になると、近辺のお寺や広場において、神棚からおろした物を持ちより燃やしている。この歳の神の火で、餅やスルメを竹や木の枝にさしたり、吊したりしてあぶり家に持ち帰り家族で食べる。そうすると、その年は家内安全、無病息災で過ごすことができると伝えられている。

3) 会津のかんしょ踊り

「かんしょ」とは会津地方の言葉で「気がふれたように、熱狂的に、無我夢中になるさま」のことを言う。かんしょ踊りの起源としては、明治初めに越後五箇浜(新潟県巻町)から伝わった「五箇浜甚句」が流行したことを受け、会津若松の人々が、その熱狂的なテンポに玄如節から借用した歌詞を合わせることで作り上げたと言われている。そのため、かんしょ踊りの特徴としては、他の盆踊りに比べるとテンポが早く、参加する人々は編み笠やドーランなどで顔を隠して、無我夢中になり踊っていたようである。その後、昭和初期まで市民の間で流行ったという。

その後しばらく途絶えていた時期が続いたが、昭和中期に七日町の常光寺などで「正調盆踊り」として再び開催されることとなった。この盆踊りは、誰もが参加できるようにテンポと振り付けを変更したことで、かんしょ踊りに比べるとおだやかなものとなった。しかし、夕方から始まるこの盆踊りも明け方近くにもなると、段々とテンポが上がり激しくなり、「かんしょ踊り」として楽しまれていたようである。

また近年、大町通りで会津の伝統的芸能を継承していくことを目的とし、「かんしょ踊り」が復活することとなった。この「かんしょ踊り」は現代の人々に親しみやすいようにアレンジされ、老若男女がそれぞれ思いおもいの格好で楽しんで踊られている。毎年8月の第1土曜日に会津若松駅から野口英世青春通りにて開催されている。



図 3-1-2 流しかんしょ踊り

4) お日市

会津若松市では古くから行われてきた夏祭りをお日市と呼んでいる。古いものは400年前の蒲生氏郷の時代から行われている。7月1日の日新町の「おんば様」から9月8日の「館の薬師様」まで45の神仏のお祭りが行われる。

このように夏祭りが行われているのは全国でもあまり例がなく、祭りはその地域の産土神(うぶすながみ)・神社、仏閣と深く結びついており、縁日ともいわれている。お日市は夏祭りの縁日とが習合して次々に開催される。

お日市は神社の縁日なので住職や宮司が担当する場合が多いが、町内の夏祭りとしても行われているので、町内会、青年会や子供会によっても行われている。

しかし、お日市は高度経済成長期の1955年(昭和30年)を境に大きく変化した。中心となる青年層が少なくなり、神輿かつぎを担う若者が減少したこと、郊外スーパーなどの進出により市中心部への関心が薄くなったことによると考えらる。しかし一方で、下町情緒やひなびた民俗的な味わいを求めて、新しい企画で人々の関心を引き起こそうとしているお日市もある。



図 3 - 1 - 3 お日市の状況

番号	名 称	開催日
(a)	長福寺	7月1日
(b)	三宝胞衣荒神社	7月7日
(c)	観音寺	7月7日
(d)	弥勒寺	7月8日
(e)	田中稻荷神社	7月10日
(f)	熊野神社	7月18日
(g)	笠間稲荷神社	7月20日
(h)	光明寺	7月21日
(i)	延命地藏尊(大町)	7月23日
(j)	延命地藏尊(七日町)	7月23日
(k)	神明神社	8月4日
(l)	常光寺	8月12日
(m)	御造酒地藏尊	8月24日

図 3 - 1 - 4 お日市の日程

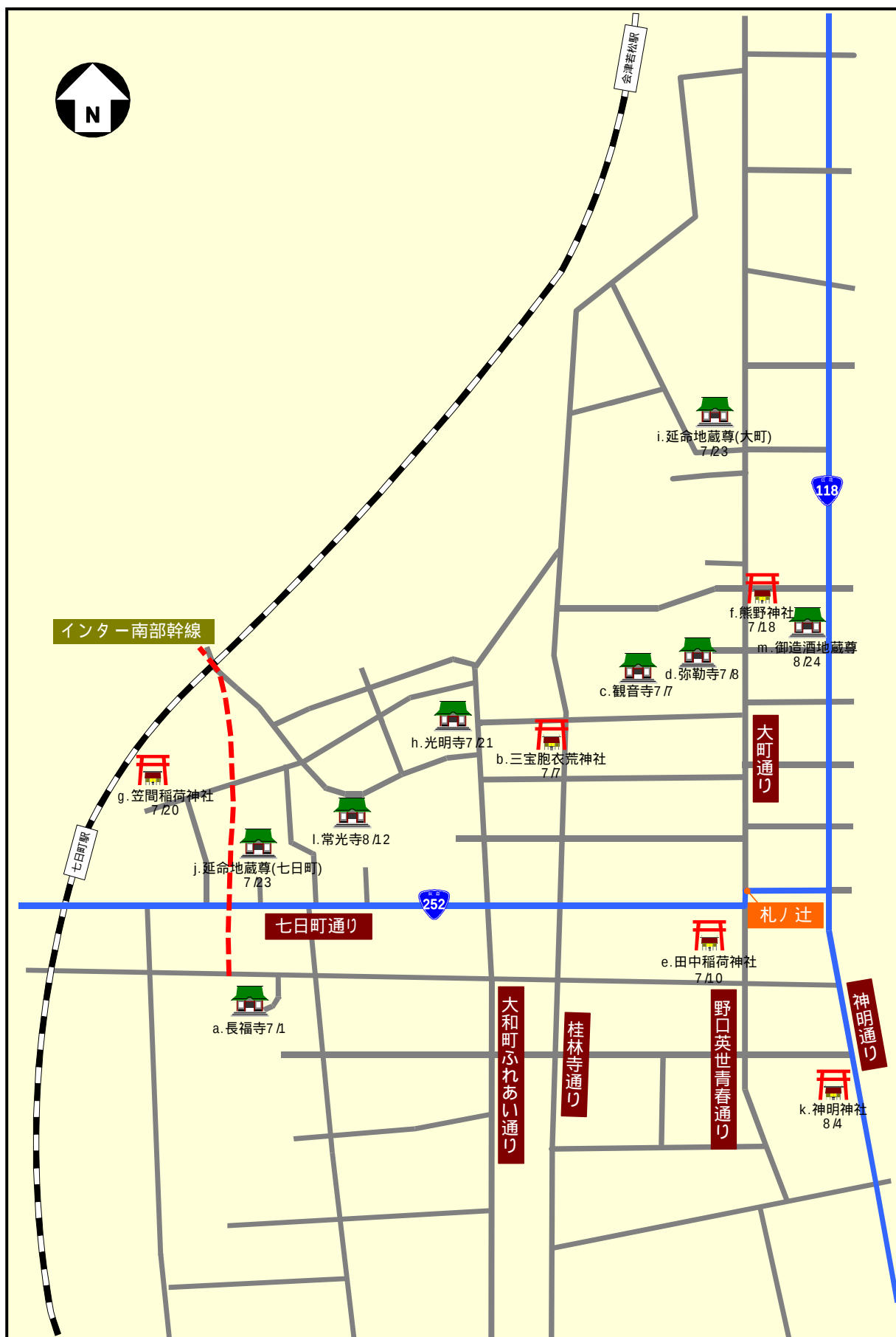


図 3-1-5 お日市が開催される神社等の位置図

(a) 長福寺

【お日市】7月1日

お日市の最初の市である。堂内に奉納されている安産に霊験のある御姥様がこの日のみご開帳され、拝むことができ、多くの人が訪れ、出店もたち並ぶ。

お堂には記帳簿が置かれており、妊婦や代表者が氏名を記入し、お寺から「へら」と安産の御札が配られる。この「へら」で御飯を盛って食べると安産がかなうといわれている。

かつては御札と一緒に赤か白の木綿の布きれが入った小さな箱包みが手渡された。赤い布きれの場合は女の子、白い布きれの場合は男の子が産まれるといわれている。

昔からお寺というより、御姥様としての信仰が篤く、1955年（昭和30年）には近郷近所から3000人の参拝客が訪れた。

現在も安産成就・母子健康の姥神様として知られているので、妊婦や婦人の参拝が多い。

▼長福寺



(b) 三宝胞衣荒神社

【お日市】7月7日

火難除け、安産の守護神である。

▼三宝胞衣荒神社



(c) 観音寺

【お日市】7月7日

観音寺には県重要美術品指定の涅槃曼陀羅、市文化財指定の胎蔵界曼陀羅があり、お日市に年一回のご開帳がある。御利益は家内安全、身体堅固、火難消除とある。

▼観音寺



(d) 弥勒寺・大日如来堂

【お日市】7月8日

御利益は家内安全、身体堅固とある。

▼弥勒寺



(e) 田中稲荷神社

【お日市】7月10日

この神社のお日市は昔からあまり注目されていなかった。

そんな時、1986年(昭和61年)に野岩線が開通し、会津若松と浅草が結ばれたことをきっかけに、浅草を参考にした「ほおずき市」が開催されるようになった。

お日市当日は三之町から北小路までの南北に走る通りを交通規制し、12時～20時まで歩行者天国としている。

1868年(明治初め)まで十日市の未明に実施されていた伝統行事である俵引きも、地元の幼稚園の協力を得て1996年(平成8年)に百数十年ぶりに行われた。

歩行者天国の道筋には50軒程の出店が立ち並び、祭囃子、三味線の演奏が祭りを盛り上げている。田中稲荷神社は酒造りの神様である松尾大神も祀られているため、市内の造り酒屋の協賛を得て、振る舞い酒も行われている。このような企画が功を奏して、毎年1万人ほどの人出がみられるようになった。

▼ 田中稲荷神社



(f) 熊野神社

【お日市】7月18日

田中稲荷神社で兼務する。町内・家内安全、身体堅固などを祈願した。お日市は7月18日に行われ、延命地藏尊と共に大町の夏祭りとして賑やかに行われている。

▼ 熊野神社



(g) 笠間稲荷神社

【お日市】7月20日

御利益は勝負事にあり、蚕養国神社の兼務で、水商売や勝負をする人の参詣が多く、遠来の信者も多いという。

また、お日市には出店が立ち並び、盆おどり、おはやしなども行われる。

▼ 笠間稲荷神社



(h) 光明寺

【お日市】7月21日

お日市には出店が立ち並び、

▼ 光明寺



(i) 延命地藏尊（大町）

【お日市】7月23日

延命、福分、除難を祈願する。大町の夏祭りとともに祭礼が行われているがその昔は善導、法然の法流をくむ念仏三昧の霊寺であった。

▼延命地藏尊（大町）



(j) 延命地藏尊（七日町）

【お日市】7月23日

延命、福分、除難を祈願する。「子守地藏尊」として信仰をあつめている。7月23日に開かれる地藏尊祭礼には子供の健やかな生育を願い、多くの人が参拝する。

▼延命地藏尊（七日町）



(k) 神明神社

【お日市】8月4日

神楽殿で神楽が奉納されるものの、宮司を先頭に神輿を牛にひかせて町内を練り歩き、山車も多く出て、先人感謝祭もあった華やかな昔の面影はなくなっていた。

1957年（昭和32年）戊辰90年祭を契機に白虎行列を中心とした会津まつりに町内単位の祭りが統一されてしまった。

▼神明神社



(l) 常光寺

【お日市】8月12日

御利益は家内安全であり、出店が立ち並ぶ他、山車も行われる。

▼常光寺



(m) 御造酒地藏尊

【お日市】8月24日

桂松院の代務。町内、家内安全、商売繁盛を祈る。町内有志者と酒造組合の協賛を得て中央通りができるため、ここに移築した。1976年（昭和51年）落慶法要。等身大の立派な地藏像がある。

▼御造酒地藏尊



5) 恵比寿講

風折烏帽子をかぶり鯛を釣り上げる姿の恵比寿様は、漁業の神、または商売繁盛の神として信仰されている。

10月20日は商家が七福神のひとつの恵比寿様を奉り、商売繁盛を祈り、恵比寿講としてお祝いする日であり、奉公人はこの日から足袋を履いた。

当日は身代に応じて肴を料理し、恵比寿棚に供え、富商は、親類、出入りの者を招き、お祝いした。豊穰、繁栄を願い、二股大根や鮭の頭を供え、ざくざく煮(大根、人参、大豆、スルメを煮た具沢山の吸い物)なども作られた。

現在でも札ノ辻界限で商いに携わる人々の間では厚く信仰されている。



図 3 - 1 - 6 恵比寿講の供え物

6) 絵ろうそくまつり

会津の伝統的な産業でもある、絵ろうそくと雪とを組み合わせ、2000年(平成12年)から始められた。1年で最も寒い2月の夜に真っ白な雪をろうそくのやわらかな光で染めながら、人々を幻想的な世界に誘う。「ゆきほたる」と名付け、御薬園と鶴ヶ城をメイン会場にし、まちなかでも店の軒先に竹筒で作ったぼんぼりに点灯している。

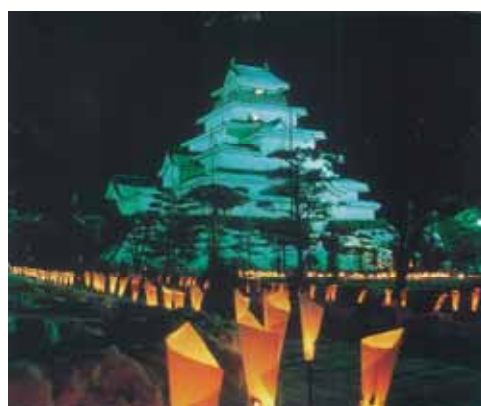


図 3 - 1 - 7 絵ろうそくまつり

3-2 会津の食

1) 鯨の山椒漬

会津は山国なので、口にする魚は川魚に限られていた。西回り航路が発達し、北海道でとれる鱈、鯨、貝柱などの乾物が、京の食文化と共に新潟港から船で会津の地に入るようになった。山椒の葉と鯨を交互に入れ、酢、醤油、みりんを煮立てて冷ましたタレを入れる。1週間から10日位漬け込み、肴にした。

山椒漬は会津藩松平家記録、家政実記の1731～1732年(享保16～17年)4代藩主松平容貞(かたさだ)の就封祝いにあたり、御相伴役を勤めた藩士松本善甫(まつもとぜんぽ)が原初という説が有力である。

▼鯨の山椒漬



2) 煮肴(こづゆ)

会津の慶弔の席には欠かせない料理である。各家によって中身は異なるが貝柱、里芋、木耳、薄切りの干し椎茸、糸こんにゃく、豆麩(会津独特の豆つぶ状の焼き麩)は必ず入れる。季節によって、絹さや、ほうれん草、みつ葉をかざる。慶事にはニンジン、仏事にはワラビを入れ、区別する場合もある。

盛り付ける器は「大平」という蒔絵を施した直径一尺(約30cm)、深さ15cmの浅い蓋付きの会津塗りに入れ吸い笠(手汐皿)という直径11cmほどのごく浅い椀に取り分ける。お客様は何杯おかわりしても良い。1751～1764年(宝暦年間)の婚礼の献立書にも残っている。現在は「こづゆ」とも言われている。

▼煮肴(こづゆ)



3) 棒鱈

真鱈を棒のように硬く干した干鱈を言う。師走には魚屋の軒先に新巻鮭と共に棹掛けされ並ぶ景色は圧巻。一匹丸ごとを一抱え、半身を半抱えといい、井戸水などで水を換えながら一週間ほど戻す。柔らかくなったら、切り分けて、下茹でし、酒、みりん、醤油で飴色になるまで煮て、骨も柔らかく食べられる。京都や山形にも同様なものがある。

▼棒鱈



4) 会津身不知柿

会津特産の渋柿で、その由来は豊穰性のため、柿の枝が折れるほど、身の程知らずに実をつける。その美味しさに我が身(自分のおなか)を考えずに食べ過ぎてしまうことから、この名が付けられた。

将軍様に献上したところ、「未だこのような美味を知らず」と称賛されたからとも言われている。

▼会津身不知柿



4 . 人 物

□大町四ッ角札ノ辻界限にゆかりのある人物

1) 海老名^{えびな} 李昌^{すえまさ} (1843～1914)

徳川昭武の随員として慶応3年(1867)パリ万博に渡り、欧州各地を見聞して帰国。鳥羽・伏見の戦いに参戦し、会津に戻り26歳で家老となる。会津落城後は戦争責任を問われ、細川家預かりとなった。5年後赦免となり、警視庁に勤務した。三島通庸(みしまみちつね)の知遇を受け、各地に勤務し、退官後は県下にさきがけて若松市政の施行とともに市長事務取扱(事実上の初代若松市長)となり、行政に参与した。

2) 海老名^{えびな} リン (1849～1909)

幼児から伶俐(れいり)さをうたわれていた。李昌(すえまさ)と結婚、会津落城後、斗南三戸(となみさんのへ)に移住。5年後上京。夫の警視庁勤務に伴い、各地をまわり、再び上京し、リンは東京矯風会副会頭となり、社会活動に励んだ。

43歳で保母の資格を取得し、若松幼稚園を設立し(当時は旧甲賀町口にあった)さらに女学校を創設した。会津における幼児教育・女子教育の先覚者である。

3) 野口^{のぐち} しか (1853～1918)

野口英世の母。息子を信じ、英世を語るにはその母しかを語らなくてはと言われる。気丈な母で世間の恩義に対してもきびしい節度を持っていた。50歳を過ぎて助産婦の免許を取得し、社会のために働きぬいた。しかし反面、明治45年の英世宛の手紙にはたどたどしい平仮名で「はやくかえってきてくだされ、一生のたのみであります」と母親の情愛をのぞかせ、3年後に英世は帰省した。気を張りつめて生き抜いた庶民の一生であった。

4) 野口^{のぐち} 英世^{ひでよ} (1876～1928)

猪苗代湖畔の赤貧農家に生まれ、加えて3歳時、囲炉裏に転落して左手を火傷。そのハンデをバネに周囲の人情を糧として世界に羽ばたき、細菌学者としてノーベル賞候補にもなった。

札ノ辻界限は、英世が現中町にあった会陽(かいよう)医院において幼年時代に火傷した左手の手術を受け、医学のすばらしさに感動し、その後は住み込みの薬局生として会陽医院で働きながら医学を学び、若松栄町教会ではキリスト教の洗礼を受けるなど、青春時代の3年間を過ごしたゆかりの深い地域である。

この様なことから、通りには「野口英世青春通り」の名前が付けられている。

5) 山内 ^{やまうち} ヨネ (1882 ~ 1945)

海老名リンの経営する私立女学校に学んだ。栄町教会でヨネを見そめ、野口は何度もラブレターを書き、英世が21歳で医術試験に合格し、支那に出発するに先立ち、将来の結婚を申し込んだがヨネはやんわりと断った。

冠木門に「三省堂」の看板を掲げて開業し、2年後結婚するが、4人の子供を残して夫が死去、ヨネは医療の最前線に立った。帰朝した英世の厚意を断り続けた。

6) 佐瀬 ^{させ} 大和 ^{やまと}

葦名氏の家臣であり、大和町に郎徒を置いたので大和町の由来にもなっている。

四天王と称されるほどの力を持ち、家中の機密を掌っており、常に騎士200、歩卒千余人を大和町に住まわせ、緊急時の備えとしたという。

7) 土方 ^{ひじかた} 歳三 ^{としぞう}

新撰組副長であり、宇都宮城の攻防戦で足を負傷、その後会津に入り、七日町にあった清水屋に運び込まれて治療を受けた。その後、函館の五稜郭に転戦し、最後まで西軍と戦った。

8) 吉田 ^{よしだ} 松陰 ^{しょういん}

1852年(嘉永5年)に東北諸藩を歴訪する大旅行をしているが、なかでも会津藩には特に関心を示し、往路と帰路の二度会津若松に来訪している。その際に、七日町にあった清水屋に泊まっている。

9) 蒲生 ^{がもう} 氏郷 ^{うじさと} (1556 ~ 1595)

豊臣秀吉の命により会津藩主となった氏郷は、会津の大改革を行い、町の名を若松に改め、鶴ヶ城を築いた。その後、城下町の経営に着手し、町割り等を行った。また、漆器、酒造などの産業も盛んにし、92万石の太守として会津に君臨した。織田信長の娘を妻に持ち、キリシタン大名であった。

10) 黒河内 ^{くろこうち} 伝五郎 ^{でんごろう} (1803 ~ 1868)

武芸者、歌人である。羽入良説義英の2男として生まれる。20歳の時、居合術の師、黒河内治助兼博の養子となった。

伝五郎は養父から伝授された居合術をもって、居合指南役に召出された。しかし、伝五郎は武芸18般あらゆるものを極めていた。なかでも柔術は稲上心妙流といい、武芸の中でも重要視していたらしい。

また、当時歌人としても知られていた。晩年、失明したが、歌を短冊に書くことができたという。

戊辰戦争の時、西軍が進攻してきたことを知った伝五郎は自刃した。享年66。墓碑は阿弥陀寺に現存している。

□写真・図版所蔵者一覧

表紙	大町通り交差点図 会津若松城下絵図屏風	福島県立博物館蔵
頁	大町四ツ角札ノ辻を再生した模型写真	福島県立博物館蔵
3頁	若松町割図	会津若松市蔵
4頁	大町付近	斎藤秀次氏蔵
4頁	甲賀町付近	福島県立博物館蔵
5頁	馬場町付近	福島県立博物館蔵
6頁	蒲生 若松城下概要図	歴史春秋出版株式会社蔵
6頁	戊辰 若松城下概要図	歴史春秋出版株式会社蔵
7頁	明治40年頃 若松城下概要図	歴史春秋出版株式会社蔵
8頁	大町	歴史春秋出版株式会社蔵
9頁	現在の旧老町	歴史春秋出版株式会社蔵
9頁	現在の旧大和町	歴史春秋出版株式会社蔵
9頁	現在の旧紺屋町	歴史春秋出版株式会社蔵
10頁	札ノ辻を起点とする五街道	会津若松市立会津図書館蔵
10頁	会津から各地へ向かう街道図	会津若松市蔵
11頁	越後街道の石畳	会津若松市蔵
11頁	米沢街道の一里塚	会津若松市蔵
12頁	札ノ辻	会津武家屋敷蔵
13頁	8世紀初めの陸奥国	会津若松市蔵
14頁	葦名時代の札ノ辻界限周辺	会津若松市蔵
14頁	戦国時代の南奥の諸勢力と城館	福島県立博物館蔵
15頁	蒲生時代 若松城下概要図	会津若松市蔵
15頁	立鶴紋	会津若松市蔵
16頁	上杉時代領主配置図	会津若松市蔵
16頁	蒲生秀行領地図60万石	会津若松市蔵
17頁	加藤時代領地図40万石	会津若松市蔵
17頁	保科正之画像	宮澤重正氏蔵
18頁	砲弾を受けた鶴ヶ城	会津若松市蔵
19頁	大町通り（昭和初期）	会津若松市教育委員会
19頁	札ノ辻 昔（明治末）	七日町三・四青年会蔵
20頁	塚原呉服店前 昔	七日町三・四青年会蔵
20頁	七日町駅から札ノ辻方面を見る 昔	七日町三・四青年会蔵
23頁	昔の常光寺	有限会社企画キャップ蔵
34頁	若松栄町教会	日本基督教団 若松栄町教会蔵
38頁	会津塗り	会津若松市蔵
38頁	株仲間帳・江戸塗仲間帳	高瀬喜左衛門氏蔵
42頁	明治期の酒蔵	会津若松市蔵
42頁	酒蔵で働く人々	塩屋秀一氏蔵
49頁	会津もめんの作業	会津若松市蔵
50頁	起きあがり小法師の作業 右	会津若松市蔵
50頁	起きあがり小法師の作業 左	会津若松市蔵
56頁	清水屋旅館	歴史春秋出版株式会社蔵
62頁	十日市の賑わい	会津若松市蔵
63頁	流しかんしょ踊り	会津流かんしょ踊り実行委員会蔵
64頁	お日市の状況	会津若松市蔵
69頁	恵比寿講の供え物	高瀬喜左衛門氏蔵
69頁	絵ろうそくまつり	会津若松市蔵

□ 出典及び参考文献一覧

『会津若松市史 1 巻～ 2 5 巻』	会津若松市
『町名の由来-おらが街のミニ歴史-』	会津若松市教育委員会
『町名歴史散歩』	歴史春秋出版株式会社
『歴春ブックレット 1 巻～ 3 0 巻』	歴史春秋出版株式会社
『七日町のいまむかし』	七日町三・四青年会
『はいからさんに逢えるまち』	アネッサクラブ
『住民方からの当界隈の情報や思い』	大町四ッ角札ノ辻界隈地域史づくり懇談会

□ 協力者（順不同敬称略）

○ 会津若松市史編纂室	○ 会津若松市立図書館	○ 会津若松市教育委員会
○ 福島県立博物館	○ 歴史春秋出版株式会社	○ アネッサクラブ
○ 七日町三・四青年会	○ 高瀬喜左衛門	○ 斉藤秀次
○ 宮澤重正	○ 塩屋秀一	○ 有限会社企画キャップ
○ ㈱白木屋漆器店	○ ㈱福西惣兵衛商店	○ 鶴之江酒造株式会社
○ 末廣酒造株式会社	○ ㈱満田屋	○ 會津壺番館
○ 会津武家屋敷		

本文の記載内容については、既存資料等に加えて地域住民の方々の当時の思い出や意見などを参考にさせて頂き作成しています。なお、本文中に歴史事実関係と異なる点がありました場合にはご容赦下さいますようお願い致します。

大町四ッ角札ノ辻界隈地域史

■ 大町四ッ角札ノ辻界隈地域史づくり懇談会参加者

《団体》

- 会津ふれあい通り大和町桂林寺町商店会
- アネッサクラブ
- 大町通り商店街連合会
- 大町四ッ角中央商店街振興組合
- 七日町通りまちなみ協議会
- 野口英世青春通り協議会

《町内会》

- | | |
|------------|-------------|
| ○ 大町五丁目 | ○ 桂林寺町四・五丁目 |
| ○ 大町二之区 | ○ 紺屋町 |
| ○ 大町三四之区 | ○ 栄町上三丁目 |
| ○ 大町一丁一之区 | ○ 下大和町 |
| ○ 大町一丁二之区 | ○ 道場小路町 |
| ○ 大町一丁三之区 | ○ 七日町一丁目 |
| ○ 大町一丁四之区 | ○ 七日町二丁目 |
| ○ 老 町 | ○ 七日町中央 |
| ○ 北小路一丁目 | ○ 七日町六・七丁目 |
| ○ 北小路二丁目 | ○ 針屋名子屋町 |
| ○ 北小路三・四丁目 | ○ 針屋町 |
| ○ 北小路五丁目 | ○ 大和町 |

■ 座長 後藤 忠俊（会津大学短期大学部名誉教授）

■ 地域史作成 事務局

- 株式会社まちづくり会津
- 会津若松市 商工課・都市計画課
- 福島県会津若松建設事務所